

# 桜木遺跡

見谷川河川災害関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005.3

高知県教育委員会  
財高知県文化財団埋蔵文化財センター



# 桜木遺跡

見谷川河川災害関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005.3

高知県教育委員会  
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター





SR4 (A3区) 出土状態 (北東より)



SX1 検出状況 (SD1 完掘時、北より)

## 巻頭図版2



SR4 A A3区 木材列1と土器1の出土状態 (南より)



SD1・SR4 A バンクBセクション (西より)

# 序

東西に広い本県は、各地域に豊かな特色がみられ、安芸市が所在する県東部においても特徴ある風土と、それに育まれた文化が受け継がれてきました。このような環境と、そこから生まれる産物は各時代において人の動きを創出し、「土佐日記」にあらわされているように古くから海上交通が発達し、港が繁栄するとともに、荘園も栄えました。安芸平野はこの県東部にあって常に中核的な役割を担ってきた地域です。

本市における本格的な発掘調査は1978年の清近岡遺跡に始まりますが、当地域では大規模開発が少なかったこともあって、その後も発掘調査が急増することはありませんでした。しかし、今世紀を迎えて懸案であった「ごめん・なはり線」が開通したことに象徴されるように、当地にも新たな時代のうねりが波及し、埋蔵文化財に関しても勇前遺跡やジョウマン遺跡の発掘調査をはじめとする各種調査のメスが入られるようになってきました。このような時こそ、真に豊かな郷土の発展のために埋蔵文化財をどのように活かすかというテーマを、文化財保護部局や行政機関のみならず、広く県民の皆様と考えていただくことが肝要ではないでしょうか。

桜木遺跡の調査では、灌漑遺構という一見地味ともいえる性格の遺跡にもかかわらず、調査時より市民の皆様に興味を持っていただき、励ましのお言葉をいただきました。本報告書の刊行によって調査成果が歴史資料になるとともに、今後市民・県民の皆様のお役に立てることを祈念しております。

最後になりましたが、暑さ寒さも厭わず発掘に関わって下さった地域の方々、整理作業にたずさわられた方々、全般にわたってご協力いただいた高知県安芸土木事務所に厚く御礼申し上げます。

2005年3月

財団法人 高知県文化財団 埋蔵文化財センター  
所長 川村 寿雄

# 例 言

1. 本書は見谷川河川災害関連工事に伴う、桜木遺跡発掘調査報告書である。

2. 桜木遺跡の所在地は、高知県安芸市川北である。

3. 調査期間ならびに発掘調査面積は次のとおりである。

(調査期間)	(調査面積)
試掘調査	
平成14年 5月13日～同年10月 3日	150㎡
立会調査	
平成14年 8月26日～平成15年 4月28日	303㎡

4. 発掘調査及び整理作業は、高知県教育委員会と財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターが高知県安芸土木事務所の委託を受け、これを実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査事務	池野かおり (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主幹)
同	長谷川明生 (同上・主任)
調査担当	池澤俊幸 (高知県教育委員会文化財課埋蔵文化財班・社会教育主事)
整理担当	藤方正治 (財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター・主任調査員)

5. 本書の編集・執筆は池澤・藤方が行った。

6. 遺構等の名称については、SR (自然流路)、SD (溝状遺構)、SX (性格不明遺構)、SP (柱穴及びピット状遺構) 等の略号を使用した。

7. 遺物実測図の縮尺は、土器・土製品が1/3、木器・木製品が1/2から1/4である。遺物番号は通し番号であり、挿図及び写真図版中の番号と遺物番号は一致している。

8. 出土遺物の色調については『新版標準土色帖1996年版』の名称を使用した。

9. 遺跡の測量は、任意の座標系を使用し、国土座標第IV系との関係を表2に示した。また、挿図中の標高は海拔高を示す。

10. 発掘調査に際しては、地元安芸市をはじめとした市内にお住まいの方々や隣接する地域に在住の方々の全面的な御理解と御協力を得ることができ、調査を円滑に進めることができました。記して衷心より謝意を表します。



11. 発掘調査及び報告書作成に際しては、高知県安芸土木事務所、安芸市立歴史民俗資料館、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターの諸氏から御助言・御協力を得た。謝意を表します。
12. 発掘調査にかかる掘削作業では（有）梶原建設、（有）横山建設、（有）森安工業に御尽力頂き、調査を完遂することができた。
13. 木器・木製品の保存処理及び樹種同定は、株式会社吉田生物研究所に委託して実施した。尚、分析の結果については、付編に掲載している。
14. 整理作業に際しては、次の方々にご尽力頂いた。御芳名を記して衷心より謝意を表します。  
入野三千子　橋田美紀　宮本幸子　岩貞泰代　山本純代
15. 遺跡の略号は下記のとおりとし、出土遺物の注記にはこれを使用した。  
02-11AS
16. 出土遺物は、財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管している。

## 凡 例

1. 土層断面図で、砂礫層についてスクリーン・トーンを使用した。
2. 平面図で、立杭など原位置を保っている木材の主として上端に橙色のアミかけを施した。

# 本文目次

第1章 序章 .....	1
I. 地理的・歴史的環境	
II. 調査に至る経過	
III. 調査の方法	
第2章 試掘調査 .....	5
第3章 調査の成果	
I. A区 .....	9
1. 調査区の概要と基本層準	
2. 遺構と遺物	
II. B区 .....	20
1. 調査区の概要と遺構・遺物	
第4章 まとめ .....	37
付編 桜木遺跡出土木製品の樹種調査結果 .....	43

## 挿図目次

Fig.1	桜木遺跡の位置 (S : 1 / 1,200,000) .....	1
Fig.2	桜木遺跡と周辺の遺跡 (S : 1 / 25,000) .....	2
Fig.3	試掘坑及び調査区位置図 (S : 1 / 3,000) .....	6
Fig.4	TP 1 ~ 7 及び調査区位置図 (S : 1 / 1,000) .....	7
Fig.5	試掘坑土層柱状図 (S : 1 / 40) .....	8
Fig.6	SD 1 平面図 A 3 区 (S : 1 / 80) .....	10
Fig.7	A 3 区バンク B 土層断面図 (S : 1 / 40) .....	13
Fig.8	A 区エレベーション及び土層図 (S : 1 / 40) .....	15
Fig.9	SX 1 ・ SX 2 木材除去状態平面図 (S : 1 / 40) .....	16
Fig.10	A 1 区西北壁土層図 (S : 1 / 40) .....	17
Fig.11	B 区木材位置図及び土層図 (S : 1 / 40, 1 / 80) .....	18
Fig.12	B 区張出部 平面・セクション図 (S : 1 / 40) .....	19
Fig.13	出土遺物 1 ~ 12 (S : 1 / 3) .....	21
Fig.14	出土遺物 13・14 (S : 1 / 2, 1 / 3) .....	22
Fig.15	出土遺物 15 ~ 17 (S : 1 / 4) .....	23
Fig.16	出土遺物 18 ~ 20 (S : 1 / 4) .....	24
Fig.17	出土遺物 21・22 (S : 1 / 4) .....	25
Fig.18	出土遺物 23 ~ 25 (S : 1 / 3, 1 / 4) .....	26
Fig.19	出土遺物 26 (S : 1 / 2) .....	27
Fig.20	出土遺物 27 ~ 29 (S : 1 / 2) .....	28
Fig.21	出土遺物 30 ~ 32 (S : 1 / 3) .....	29 ~ 30
Fig.22	出土遺物 33・34 (S : 1 / 4) .....	31 ~ 32
Fig.23	出土遺物 35・36 (S : 1 / 4) .....	33 ~ 34
Fig.24	出土遺物 37・38 (S : 1 / 4) .....	35 ~ 36
Fig.25	周辺地形図 (S : 1 / 10,000) .....	39

付図 1	A 区 平面図 (SR 4 等) (S : 1 / 40)
付図 2	A 2 ・ 3 区 下層平面図 (SD 2 ・ SR 5) (S : 1 / 40)
付図 3	A 区 土層図 (S : 1 / 40)
付図 4	出土遺物 39 (S : 1 / 4)

## 表目次

表 1	桜木遺跡と周辺の遺跡 .....	3
表 2	調査の座標系と国土座標第 IV 系の関係 .....	8
表 3	桜木遺跡出土遺物観察表 1 .....	41
表 4	桜木遺跡出土遺物観察表 2 .....	42

# 写真図版目次

- 巻頭図版1 上：SR4（A3区）出土状態（北東より）  
下：SX1 検出状況（SD1 完掘時、北より）
- 巻頭図版2 上：SR4 A A3区 木材列1と土器1の出土状態（南より）  
下：SD1・SR4 A バンクBセクション（西より）
- PL.1 上：A1区 調査状況（北より）  
下：A1区 木材検出状態（南より）
- PL.2 上：A2区 木材出土状態（北より）  
下：A2区 調査状況（西より）
- PL.3 上：A2区 完掘状態（北より）  
下：A2区 木材列2（北より）
- PL.4 上：A2区（北より）  
下：A2区 木材列5（西より）
- PL.5 上：SD1 A3区 検出状態（西より）  
下：SD1 完掘状態（西より）
- PL.6 上：SR4 A3区（西より）  
下：同上（東より）
- PL.7 上：SX1（北より）  
下：SX1 上層木材除去状態（北東より）
- PL.8 上：SX1 上層木材除去状態（西より）  
下：SR4 A 北岸 壺（1）出土状態、木材組合せ状態（南より）
- PL.9 上：A3区 SX2, SP1・2付近出土状態（西より）  
下：SX2 出土状態（西より）
- PL.10 上：SX2 埋土除去状態（東より）  
下：同上（北より）
- PL.11 上：SR6 A3区 出土状態（西より）  
下：同上（東より）
- PL.12 上：バンクB SR4 A, SR5 セクション（南西より）  
下：SR6 A2区 木材出土状態（西より）
- PL.13 上：B区西張出部 杭と板材の出土状態（南東より）  
下：B区南部 杭と板材の出土状態（東より）
- PL.14 上：A2区下層 杭（SR4）が木材（SR6）を貫通  
A3区 SR4北岸 板と横材の組合せ（東より）  
中：A1区 25と土器  
TP6 鉢（4）出土状態  
下：SR4 A北岸セクション  
A3区 現地説明会
- PL.15 上：出土遺物1（5,7,8,9,10,11,12）  
下：出土遺物1（1,2,4,6）
- PL.16 出土遺物2（13~15）
- PL.17 出土遺物3（17,18,20~22）
- PL.18 出土遺物4（23~26,28）
- PL.19 出土遺物5（30~34）
- PL.20 出土遺物6（35~39）

## 第1章 序章

### I. 地理的・歴史的環境

桜木遺跡が所在する安芸平野は、安芸川と伊尾木川による沖積平野で、山地が海岸に迫る県東部地域の中核となってきた。沖積平野の低地部分は現在広く農地として利用されているが、これまでの遺跡分布や発掘の調査成果からみると遺跡は少なく、かつては広く河川の影響を受けたものとみられる。桜木遺跡は安芸川、伊尾木川の直接的影響を受け難い丘陵際に所在するが、今次改修の対象である見谷川等の影響を受けており、また過去においては現在と異なる流路も想定できる。

安芸地域では、現在縄文時代以降の遺跡が知られているがその数は少ない。弥生時代になると遺跡数も増加し、安芸川の両岸に発達する河岸段丘上に遺跡が分布する。発掘調査例もいくつかあり、まず安芸川東岸の清水寺岡遺跡では6棟の竪穴住居跡の他、土坑、溝、ピット等が検出され、弥生時代中期後半を中心に、後期前半までの時期に比定されている<sup>(1)</sup>。竪穴住居跡から石鏃とともにサヌカイトのチップが多量に出土しており、讃岐産石材による石鏃の製作が想定されている。勇前遺跡では後期の竪穴住居跡4棟が検出され、讃岐地域からの搬入土器とともに有茎式の打製石鏃、ガラス小玉が出土している<sup>(2)</sup>。西部の妙見山麓にある清近岡遺跡では、中期末の土坑墓や後期の竪穴状遺構が検出されている<sup>(3)</sup>。これらの遺跡は1～1.5kmの距離をもって、平野周縁の丘陵や段丘上に所在している。伊尾木川の河岸段丘上の切畑遺跡では2個の銅鐸（突線紐4式）、神谷遺跡では広形銅鏃、見谷川沿いで今次調査地より上流側の山田山遺跡では粘板岩製の有樋石剣が出土している<sup>(4)</sup>。安芸市は本県における銅矛出土の東限で、銅鐸との混在地域である。

古墳時代以降の発掘調査例はさらに少ない。ジョウマン遺跡では5世紀前半に比定される溝跡や土器が検出された<sup>(5)</sup>。同遺跡は、沖積平野中央部の自然堤防上に位置する。見谷川が安芸川に合流



Fig. 1 桜木遺跡の位置 (S : 1 / 1,200,000)



表 1. 桜木遺跡と周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代
1	桜木遺跡	水路跡	弥生～近世
2	高土山遺跡	散布地	弥生
3	山田山遺跡	散布地	弥生～近世
4	上島遺跡	散布地	弥生
5	猫ヶ内遺跡	散布地	中世
6	切畑遺跡	散布地	弥生
7	有井城跡	城館跡	中世
8	岡遺跡	散布地	弥生～近世
9	安芸橋畔遺跡	散布地	弥生
10	江ノ川畔遺跡	散布地	弥生
11	河原田遺跡	散布地	弥生
12	ヤナギダ遺跡	散布地	中世
13	金政遺跡	散布地	弥生
14	玉造遺跡	散布地	古墳
15	春日遺跡	散布地	中世
16	シガ屋敷遺跡	散布地	弥生・古代・近世
17	ジョウマン遺跡	散布地	弥生～古代
18	安芸城跡	城館跡	中世
19	瓜尻遺跡	散布地	古墳・中世
20	マテダ遺跡	散布地	古墳・中世
21	野神遺跡	散布地	古墳
22	善次屋敷遺跡	散布地	中世
23	内原野窯跡群	窯跡	近世
24	勇前遺跡	散布地	古代
25	中野遺跡	散布地	縄文・中世
26	日林坊遺跡	墳墓	弥生
27	鶴ヶ丘遺跡	住居跡	弥生
28	神谷遺跡	散布地	弥生
29	清水寺岡遺跡	散布地	旧石器～弥生・中世
30	安芸次郎城跡	城館跡	中世
31	安芸太郎城跡	城館跡	中世
32	西ノ島遺跡	散布地	古墳

する地点で今次調査地からもほど近い西ノ島遺跡では、古相の須恵器や陶馬等が採取されている。西方の妙見山麓部に所在した一ノ宮古墳では、銀環、馬具、須恵器の出土が知られている<sup>(6)</sup>。

古代に関する知見も少ないが、近年調査された安芸川西岸の瓜尻遺跡では小規模な建物跡や遺物が検出されており、律令期に比定できる。調査面積は少ないが、当地域の集落の様相に関する貴重な資料となる<sup>(7)</sup>。安芸川下流西岸地域は、条理地割が想定される地域である。史料における安芸の地名の初現としては、『続日本紀』の大宝2（702）年項があり、続いて同じく『続日本紀』の神護景雲元（767）年「安芸郡少領従五位下凡直伊賀麻呂…」、『和名類聚抄』の安芸八郷の記述を挙げることができる。平安時代以降の安芸庄領主は、源雅光、九条家、皇室、西明寺と変遷する<sup>(8)</sup>。

戦国時代には「土佐の七守護」に数えられる安芸国虎が当地を支配し、安芸城を築いた。同城は安芸川下流域の平野部にある独立丘陵に所在し、安芸川を外濠としていたと考えられる。しかし、長宗我部氏による土佐統一の過程で安芸氏も滅びる。近世になると、新たに土佐国領主となった山内氏の家老である五藤氏が安芸に入れ置かれる。安芸城跡に営まれた五藤家屋敷跡の発掘調査では多彩な遺物と遺構が検出され、県下の近世遺跡について語る上で欠かせない成果をあげている<sup>(9)</sup>。

#### 註

- (1) 『清水寺岡遺跡』安芸市教育委員会 1990
- (2) 『勇前遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2002
- (3) 『高知県安芸市清近岡遺跡発掘調査報告書』安芸市教育委員会 1979
- (4) 『安芸市史』安芸市役所 1980
- (5) 『ジョウマン遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2003
- (6) 西ノ島遺跡は不時発見、一宮古墳は消滅している。註4。
- (7) 『埋文こうち第16号』高知県教育委員会 2003
- (8) 註4, 『安芸市立歴史民俗資料館図録』安芸市教育委員会 1995
- (9) 『五藤家屋敷跡発掘調査報告書』安芸市教育委員会 1987

#### 参考文献

- 森田尚宏・久家隆芳『勇前遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2002  
出原恵三・名木 郁『ジョウマン遺跡』高知県埋蔵文化財センター 2003



## II. 調査に至る経過

見谷川は、施工前の状態で川幅4～5mと狭く、通常は水量も多くないが、上流部では河床勾配が急で豪雨時にはしばしば氾濫し、周辺の農地や家屋に被害を及ぼしてきた。2001年6月の集中豪雨では床上浸水等の多大な被害を被るという状況のもと、高知県安芸土木事務所は見谷川河川災害関連事業を2001年より計画・実施してきたが、2002年度の施工予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である高士山遺跡の至近に及ぶことが明らかとなった。同年度に同土木事務所長が高知県教育長あて提出した照会文書に基づいて、同事務所と高知県教育委員会文化財課は協議を行い、事前の試掘調査を実施することとした。その結果、後記のような結果を得たので両者は再び協議し、TP3およびTP6付近での立会調査を実施することとした。調査は試掘調査と並行して2002年8月26日～2003年4月28日の間、工事との調整により断続的に行った。立会調査の総調査面積は303㎡である。なお、発見された遺跡は直近の高士山遺跡とは立地および性格が異なるため、新たに「桜木遺跡」と命名し、登録された。

## III. 調査の方法

試掘調査は、元の河川に沿った道路や護岸の施工計画地内の各所に、開口部3～4m四方を基本とする試掘坑を設定して行った。掘削には重機を使用し、土層の観察、記録、遺構および遺物の検出、撮影を行った。A、B調査区では、表土や元の川底の堆積物を重機で除去した後、上層の砂礫層についても出土遺物に注意しながら主に重機を使用した。A区のSD1検出面、B区の木材検出面以下では主に人力によって遺構や流路跡の検出および掘削を行った。遺構等の実測に際しては、適宜測量軸を設定して縮尺20分の1で図面を作成し、土層断面図も作成した。測量の基準および本書の図版には、工事にあたって安芸土木事務所が設置した任意座標系を使用した。国土座標第IV系との関係は表2に掲げた。

上記のように調査が立会調査という形で行われたことと、原因が河川改修という特性から、通常の面的な調査を行うことができず、A区ではTP3 (=A1区)・A2区・A3区、B区および周辺ではTP6・TP7・張出部・B区本体部の順に分割した調査となった。そのため後述するように、調査の統一性や全景撮影に関して限界が生じたことは否めない面がある。

## 第2章 試掘調査

Fig.3のごとく試掘坑を配して調査を行った結果、TP3で木材群、TP6で遺存良好な土器群、TP1と7で各々立杭1本を検出した。期間は2002年5月13日～6月6日、10月2日～3日である。なお、TP11～14は、立会調査の一部として2003年4月28日に実施した。

各試掘坑の土層模式図はFig.5のとおりである。TP9、10では20～30cm大に及ぶ河原石の層が存在する。TP10では小枝や木片を含む層が存在し、TP6以西との共通性が一定認められる。TP13では地表下2m余りまで砂礫層で、下層では20数cm大の礫を含む。さらに下層で認められた、暗灰色粘土に明色の小礫を含む比較的締まった無遺物層は、A調査区の確認トレンチやB調査区でも該当する土層が存在し、当地での普遍的な基盤層と認識できる。TP8～10では窯道具を含む近世以降

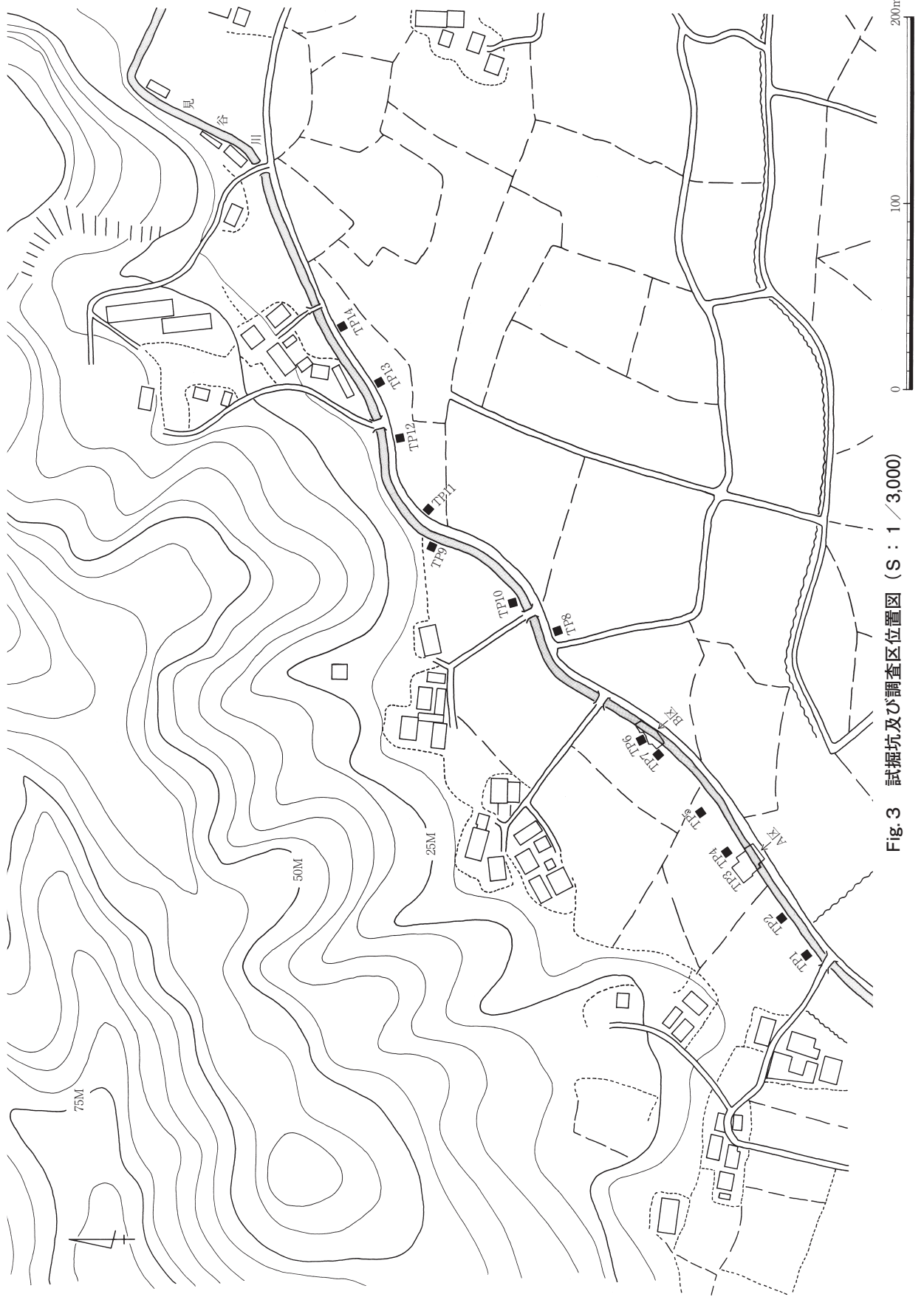


Fig. 3 試掘坑及び調査区位置図 (S : 1 / 3,000)



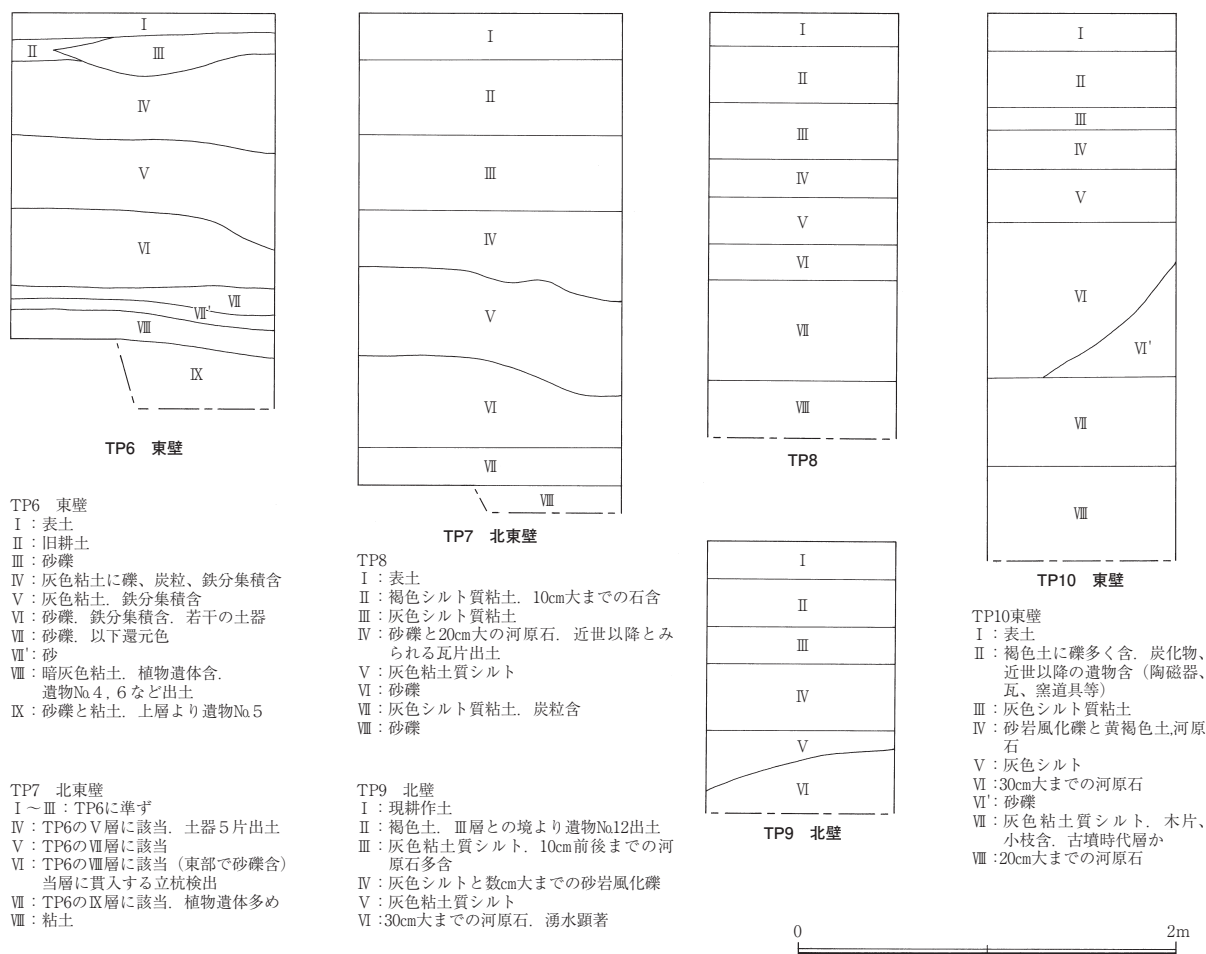


Fig.5 試掘坑土層柱状図 (S : 1 / 40)

見谷川任意座標系		国土座標第IV系	
X	Y	X	Y
6100	950	56479.765	39707.195
6150	1050	56529.513	39807.304
6090	980	56469.692	39737.166
6090	970	56469.717	39727.168
6160	1040	56539.536	39797.330
6150	1040	56529.537	39797.306
6150	1030	56529.562	39787.306

表2 調査の座標系と国土座標第IV系の関係

の遺物が出土している。A, B区を含む一帯でみられる氾濫を繰り返す状態から、河道の固定化を進めて農地を整備した時期を示唆する。TP8~14では中世以前に遡り得る遺物は出土していない。

## 第3章 調査の成果

### I. A区

#### 1. 調査区の概要と基本層準

試掘坑TP3で木材列を検出したことにより、設けた調査区である。工程上、調査は施工前の河川北西岸で道路整備部分に位置する試掘坑TP3、ほぼ北西岸施工部分に該当するA2区、施工前の川底部を含む中央部及び南東岸施工部分に該当するA3区の3次に分けて行った。TP3およびA2区の調査時には、遺構の全体規模に対する調査区の狭さなどから流路跡を十分に把握できず、基本的に木材集積遺構としての調査にとどまった。この反省と得られた知見を踏まえ、A3区調査時には流路跡プランの検出に努めた。よって、TP3およびA2区の遺構等に関する記述はA3区での成果を踏まえて行う。なお、以下ではTP3をA1区と改称する。

出土遺物の多くは木材で、土器は全般に少ない。以下では、遺物について言及のない場合は原則として土器が出土していないものとする。

本調査区の基本層準は、付図3にみるごとく各期において流路であったことを示している。SD1埋没以後の時期についてはA1区で出土した須恵器7や、SR3出土の11を参考にできる。今次調査で確認した須恵器や土師質土器はこれら2点にとどまるが、一定の指標となる。バンクAで観察できるXIV層以下は均質な粘土が水平に堆積しており、遺物は出土していない。基盤層として認識できる。XII層まで土質に顕著な相違がなく、明度の異なる互層であり、下層ほどよく締まる。XV層以下では、XII層以上および流路跡埋土で通有であった植物遺体や有機物、炭粒を含まない。今次検出した流路跡群の形成以前の状況を示している。

#### 2. 遺構と遺物

##### (1) 溝跡および流路跡

弥生時代末期から古代以降にわたる各期の流路跡が確認できた。その中でSD1は、断面形状や深さに人為性が明瞭に看取されることから、SDの略号を使用する。先行するSR4, 6には木材の設置等がみられるが、自然流路の埋没に伴って木材を設置していった経緯がうかがえる点もあり、プランの人為性について検討の余地があるため、SRの略号を使用する。使用された木材は、それら自体の多くが加工されている。板材・角材や先端加工、あるいは柄穴等を持つものもみられ、転用材も少なくないと考えられる。出土した土器は少ないが、遺構に伴ったものもある。

##### SD1

A3区で検出した東西位部分では幅3m、深さ0.7mを測り、テラス部分を持つ。埋土は10cmまでの砂礫単層で、下層の流路跡等の埋土とは明確に異なる。SR4Aをほぼ踏襲しているが、少なくともA3区では木材遺構を伴わないことと、岸の立上りが急角度かつ直線的である点に相違がある。しかし、A3区南部から南へ向かう部分では立上り角度と深さが急減し、この属性を失っている。また、図化できなかったが、A1, A2区でもSR4の上位に砂礫層が存在しており、A3区と同様にSR4にほぼ重なって本遺構が延伸していた可能性が高い。遺物は、弥生末～古墳初頭の土器片が数点出土している。

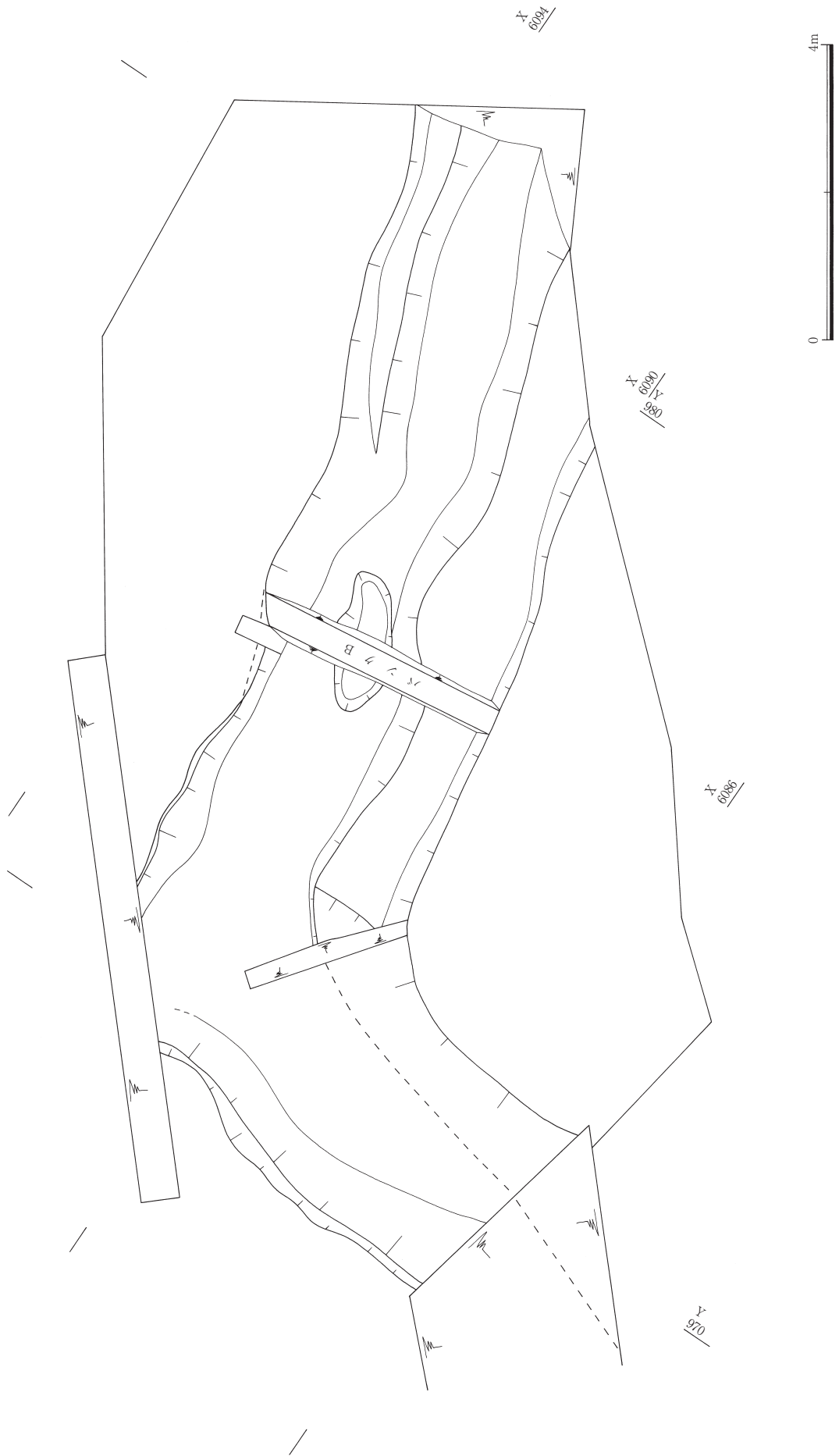


Fig.6 SD1平面図 A3区 (S : 1 / 80)

## SD2 (付図2, 3)

A3区においてSR5埋土除去後に検出した。幅90cm、深さ30cm弱を測り、断面は逆台形を呈す。一部を検出したのみであるが、直線的なプランを有する。本遺構に沿って木材片が検出されたが、遺構床面からは浮いている。これらの木材片は、SR4のものとは概して小型で、原位置を保っていない。A2区下層でも木材が集中する部分があり、本遺構の延長線上に位置する。その中には、SR4Aに伴うとみられる上層からの杭が貫通しているものがあった(PL14)。埋土は、SR5と同質のものに小礫を含む。

## SR1

バンクAの断面で認められる流路跡で、平面的な検出は行っていない。層間にV層が入ることから二時期以上に分けられるが、その時間差は不明で、一括して扱った。出土遺物はない。

## SR2

バンクAの土層断面で流路状の部分が認められる。図にはないが、調査区東南壁の土層では明瞭な立上がりが観察できた。出土遺物はない。

## SR3

バンクAの断面で認められ、東南壁でも対応する可能性のある土層が認められた。3層下面は立上がりがごく緩やかで、1,2層の段階とは時期差も想定できる。土師質土器皿11が2層より出土した。

## SR4A

調査区中央を東西に横断する流路跡で、土層断面で明確な掘削を指摘し難いことからSRの略号を付すが、各所に木材を使用した遺構を伴う。SD1による破壊で形状不明な部分もあるが、幅3m前後、深さ0.8mを測る。断面図でみる通り、テラス状の部分を持ち、底付近には凹凸があって不整形である。北岸の木材列1は、長い丸太材を軸とした横材と杭や矢板を使用した護岸遺構と考えられ、僅かに湾曲しながらも直線的に構築されている。39や37は、丸太材や矢板の中で最大級である。39は柄穴に杭を打ち込んで固定していた他、矢板と横材を組み合わせた部分も認められた(PL14)。35のように大型の材が深く設置されている例もある。

南側では、後述するSX1やSX2、ピットとの関連が考えられるが、SD1に分断されていることや、杭を含む遺構の特性上、それらの機能や時期の詳細については確定が難しい。また、2箇所でもA3区の南外側へ向かって分岐する流路は、木材の属性や設置状態および埋土の共通性や、層位関係からみて本流路跡に近い時期のものと考えてSR4BやSR4Cの略号を付した。共通する埋土はシルト質粘土などに炭化物の粒を含むものである。

本項冒頭で述べたような経緯により、A1,2区の木材群と本流路跡との関係については解明できていない点があるが、木材列1は一定延伸している。また、木材列2や5付近についても木材の

属性や設置状態、検出標高、および土層からみて、少なくともSD 1やSR 5, 6よりはSR 4に近い時期のものと推定する。A 2区では斜めに木材列4に向かう木材列が認められるが、木材列1との交差部にバンクAがあって、当該部の構造が明確でない。A 1区では、木材群を覆う砂礫層であるIX層と、当流路跡やSD 1との関係が留意されるが、確認はできなかった。土器の出土状況に関しては、A区で遺構に伴って確認できた土器の多くがSR 4 Aと木材列3, 4に伴っており（付図1）、木材に添った例もある。壺1についてはほぼ検出位置で廃棄されたとみられるが、その他の破片については言及できることは少ない。しかし、概して顕著な磨耗はみられない。

#### SR 4 B

下位に存在したSR 7との区別が難しかったが、東岸部で明瞭な護岸材や、西岸部を示唆する南北位の杭列から、調査区外南方へ延びる流路あるいは溝跡が復元できる。SR 7との関係は付図3下からわかるが、同SRの埋没が砂礫層などによって進んだ段階で左記の木材を設置し、SR 4 Aと直交する方向に流路を設定したことが看取できる。同図からは、SR 4 B東岸で木材が2度にわたって設置されていることもわかる。Fig. 8中段図では、SR 4 B西岸の杭群はSX 1より上位にあるが、当流路の機能時にSX 1が流路内に設置されたとすれば、両者の先後関係を決定する要素ではない。

以上より、SR 7埋没後にSR 4 AやSR 4 Bの木材設置、SR 4 B埋没、SR 4 B再構築、SX 1構築といった各局面があったことが想定できるが、先後関係を正確には決定できない。しかし、SR 4 Bの木材およびその使用方法の類似性や埋土の質等からみて、あまり大きな時間差はないものと考えられる。なお土器については、比較的大きな体部片である3が下層の砂礫層より出土している。

#### SR 4 C

A 3区南部で南へ開く流路跡である。SX 2を除いて木材等の出土は僅少であった。SX 2以南の埋土は、シルトと粒度1 cm以下の砂礫が互層をなす。南端隅には底面よりさらに15cmの落込みがあり、その部分の埋土は植物質を多含する褐灰色シルトであった。A 2区の木材列5が当流路跡と同時期に機能していたとすれば、関連のあった可能性がある。

#### SR 5

A 3区北部からさらに調査区外北方へひろがるとみられる。付図3のバンクAで弱い立上がりは認められるのみで、流路跡とすることは是非やその規模については不明な点が多い。埋土の土質がSR 6に近似していることもあって、面的かつ層位的な掘り下げができなかったが、SD 2との切り合い関係が時期差を示している。埋土には木片や炭化物を含むが、木材は原則的に含まない。

#### SR 6

A 3区北部で検出した流路跡で、立上がりはごく緩い。北側は調査区外へ続き、南側はSR 4やSD 1に破壊されており、肩部は検出されていない。東南方向から西へ続く流路と、北方調査区外へ延びる流路が交わっている。各種木材が出土したが、SR 4のように設置された状態の護岸材や



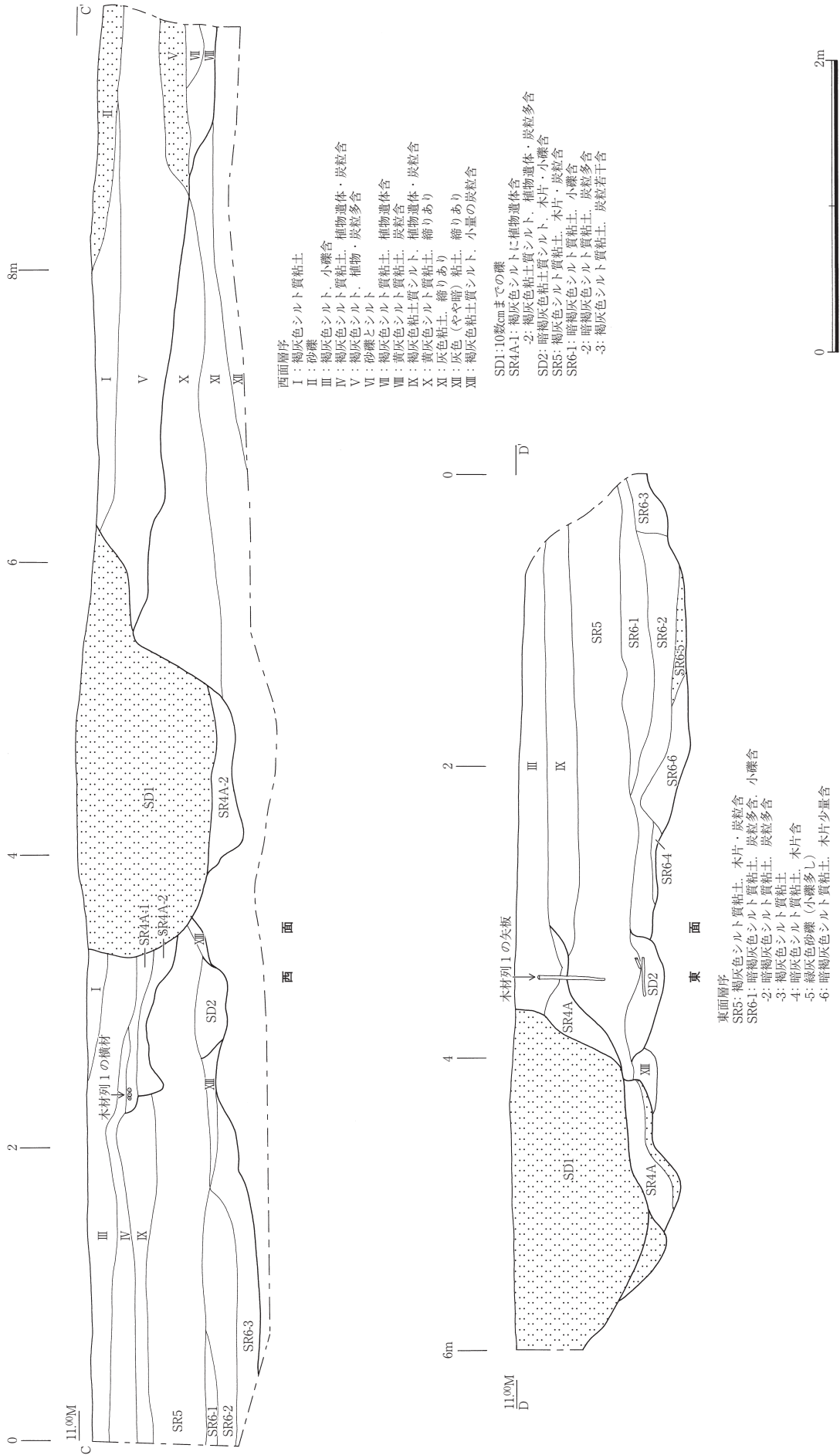


Fig. 7 A3区バンクB土層断面図 (S : 1 / 40)

大型材は認められず、小型の破損材や原位置を離れたとみられるものが多い。立杭の設置時期については一般に確定が難しいが、付図2のA3区北壁際の丸杭の上端はSR6-1層を除去して検出されたので、SR4の杭が貫通したものなどではなく、それ以前の造作があったことを示す。

## SR7

SR4Bの下位で検出した流路跡で、中層以下は砂礫層を主とする。北西岸にあたる部分が検出されているとみられるが、ごく一部であり、SR4Bが重なることもあって全容は不明である。上層のシルト層はSR4Aとも類似しており、時間差は短い可能性がある。

### (2) 木材列

#### 木材列2

A2区で検出した1列の矢板列と先端加工した2列の丸杭列からなる遺構である。丸杭は径4～6cm、長さ50～90cm程度を測り、列間に直交する形で棒材等が配置されている。Fig.8-A2区からわかるように矢板は上位にあり、時間差が存在する可能性がある。本遺構と木材列1の間には砂礫層があった。板材はほぼ全てが幅11～12cmを測り、斉一性がある。東端に木材列5が接する。南側では深さ25～30cmを測る落込みが認められたが、埋土やプランの不明瞭さなどにより、全容を解明できなかつた。落込みの埋土は暗灰色粘土に植物遺体を含むものである。当該部の西側には、南北位を指向する棒材も認められる。

#### 木材列3, 4

Fig.10北壁土層図やFig.8-A1区にみる砂礫層との関係から、流路の西岸にあたると考えられる。板材や棒材は厚さ2～5cm強、杭は約2cmを中心に6cmまで認める。本木材列の杭はこのように木材列1などと比べて小型の角杭や板杭が多く、横材の規模などにも比較的共通性がある。また10数cm大の石が木材に伴って存在した。木材に添って出土した土器片もある(付図1, PL14)。G-G'ラインでIX層上に位置する木材は、木材列1との比較では20数cm上位にある。

木材列4と3の交差部には杭が集中し、さらに南東へ延びていることから木材列1や5との関係も留意される。

#### 木材列5

A2区木材列2の東端からSR4Aを横断する矢板や杭、丸太材である。矢板や板杭に挟まれている丸太材は直径約12cmで、先端加工されている。矢板あるいは板杭は幅8～17cmを測り、杭は角材や板杭であるなど、木材列2とは異なる。本木材列は、位置関係から木材列4との関係も留意されるが、使用材や構造が異なる。検出標高は木材列1や2より低く、A2区下層木材群に近い。本遺構をSR4Aの水制遺構とみた場合、SR4CやA2区南方、あるいは木材列4方向への導水効果を想定できるが、既述のように他遺構との関係について不明確な点がある。

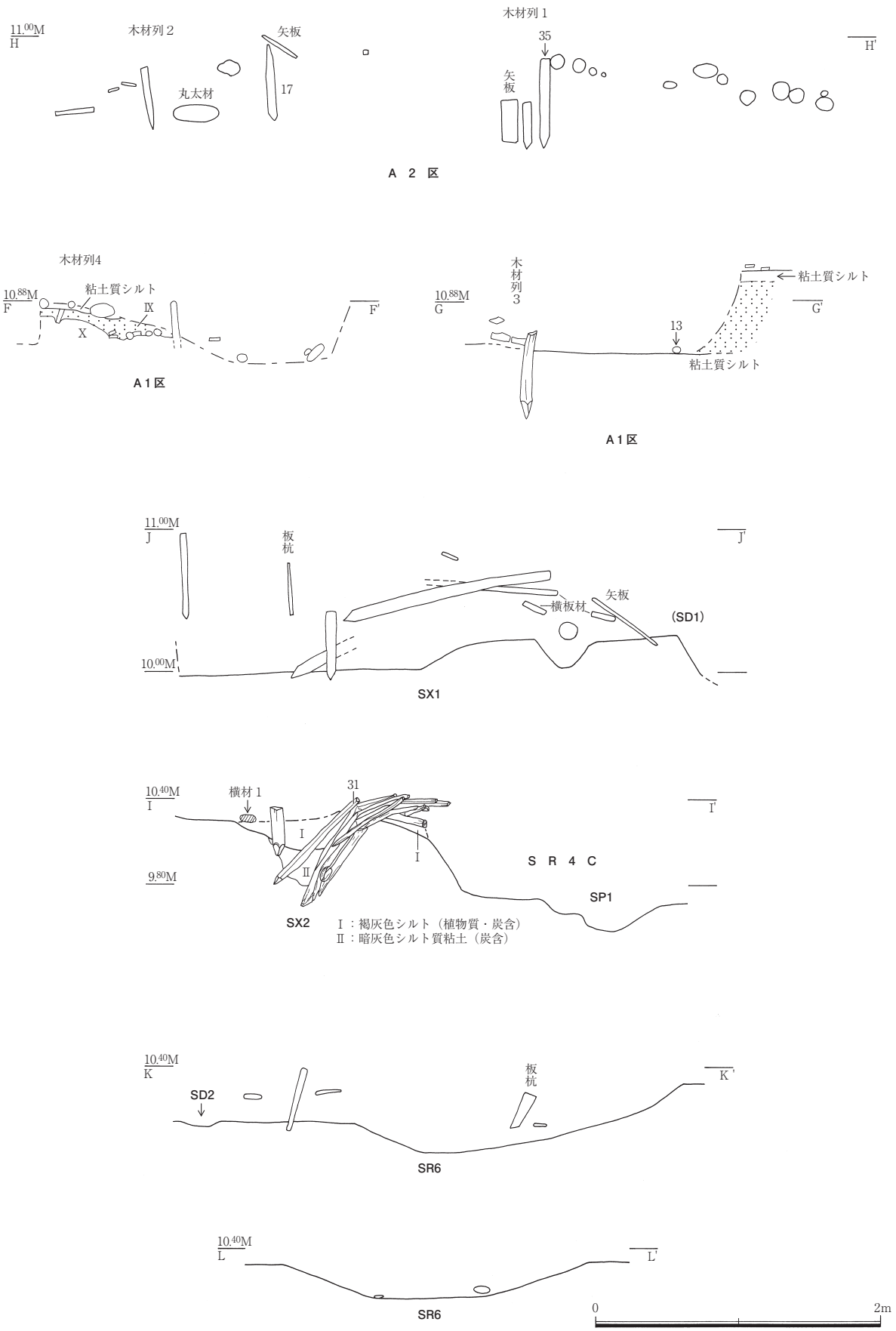


Fig. 8 A区エレベーション及び土層図 (S : 1 / 40)

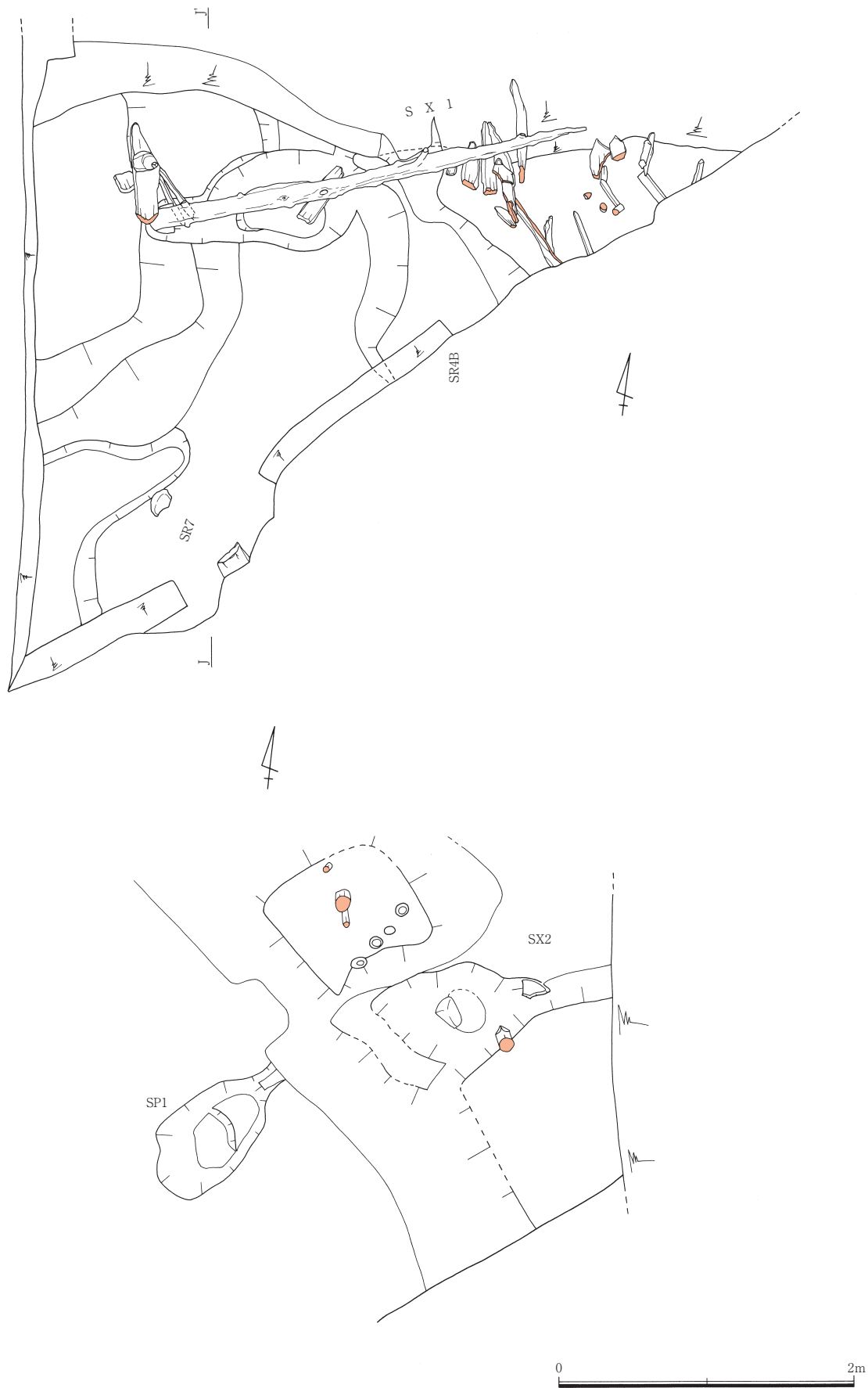


Fig.9 SX1・SX2木材除去状態平面図 (S : 1 / 40)

### (3) 性格不明遺構

#### SX1

A3区において、SR4A南岸に位置する木材集積遺構である。SD1の埋土を除去した段階で本遺構の北面が顕れたが、侵食によって木材の端部が露出し、その部分に磨耗がみられた。構造は、SR4Bを横断して長さ3m、最大径約14cmの丸太横材を矢板や杭も使用して固定し、それと直交あるいは立てかけるように設置した長い棒材が骨格となっている（Fig. 8, PL7・8）。棒材は尖端加工されている。SR4A側には矢板や板杭が並ぶ。下層の丸太横材はFig.9上のごとく一端を流路岸に埋め込み、さらに両端を矢板や杭で固定していた。丸太横材の下の底面には凹みがある。上記の骨格に、板材や角材を含む長短の木材を重ねている。木材間は砂礫ないしシルトで充填されていた。

本遺構は井堰のようにもみえるが、横材に直交させた棒材が先端加工されているにもかかわらず、ごく浅い角度で設置されていることなどが留意される。SR4AやSR7との関係は既述のとおりで、木材列1と対応する位置にもある等、本遺構の機能や性格については検討すべき点が多い。

#### SX2

SR4AとSR4Cの交差部に設けられたピット、杭、その他の木材群からなる遺構で、該当部にはその他にも整形が施されているとみられる。径100cm弱、深さ50cmを測るピットには、先端加工された長さ100cm余、幅5cm程度の杭が設置されて

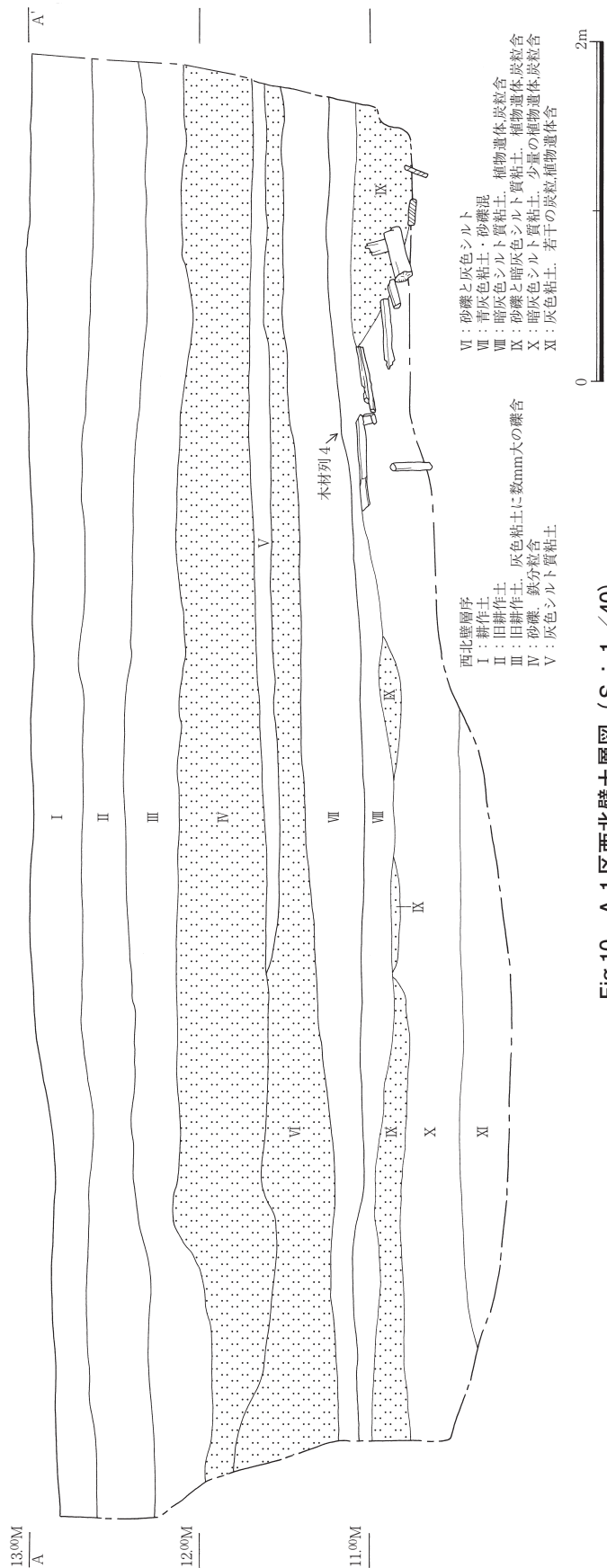


Fig.10 A1区西北壁土層図 (S : 1 / 40)

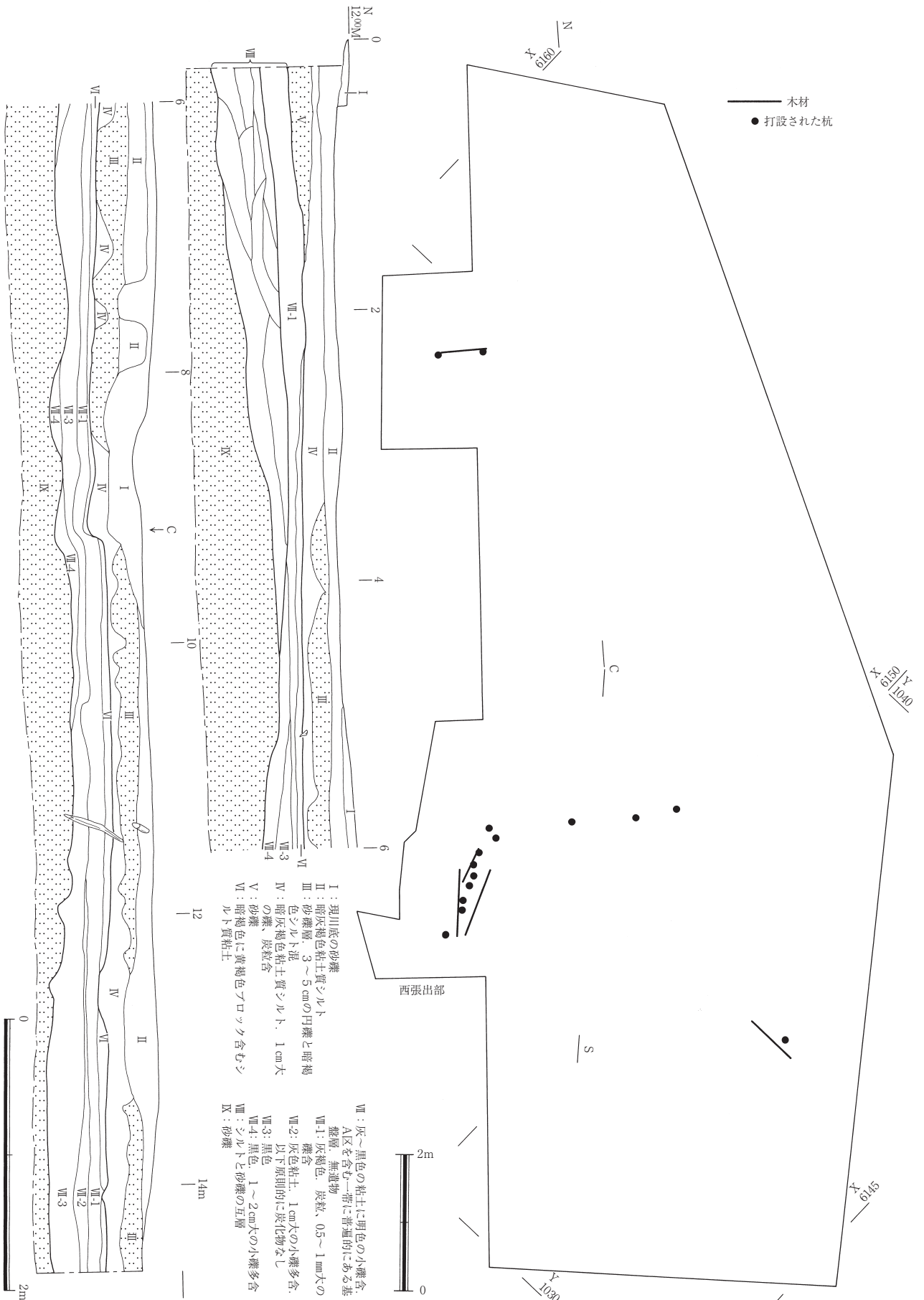


Fig.11 B区木材位置図及び土層図 (S : 1 / 40, 1 / 80)

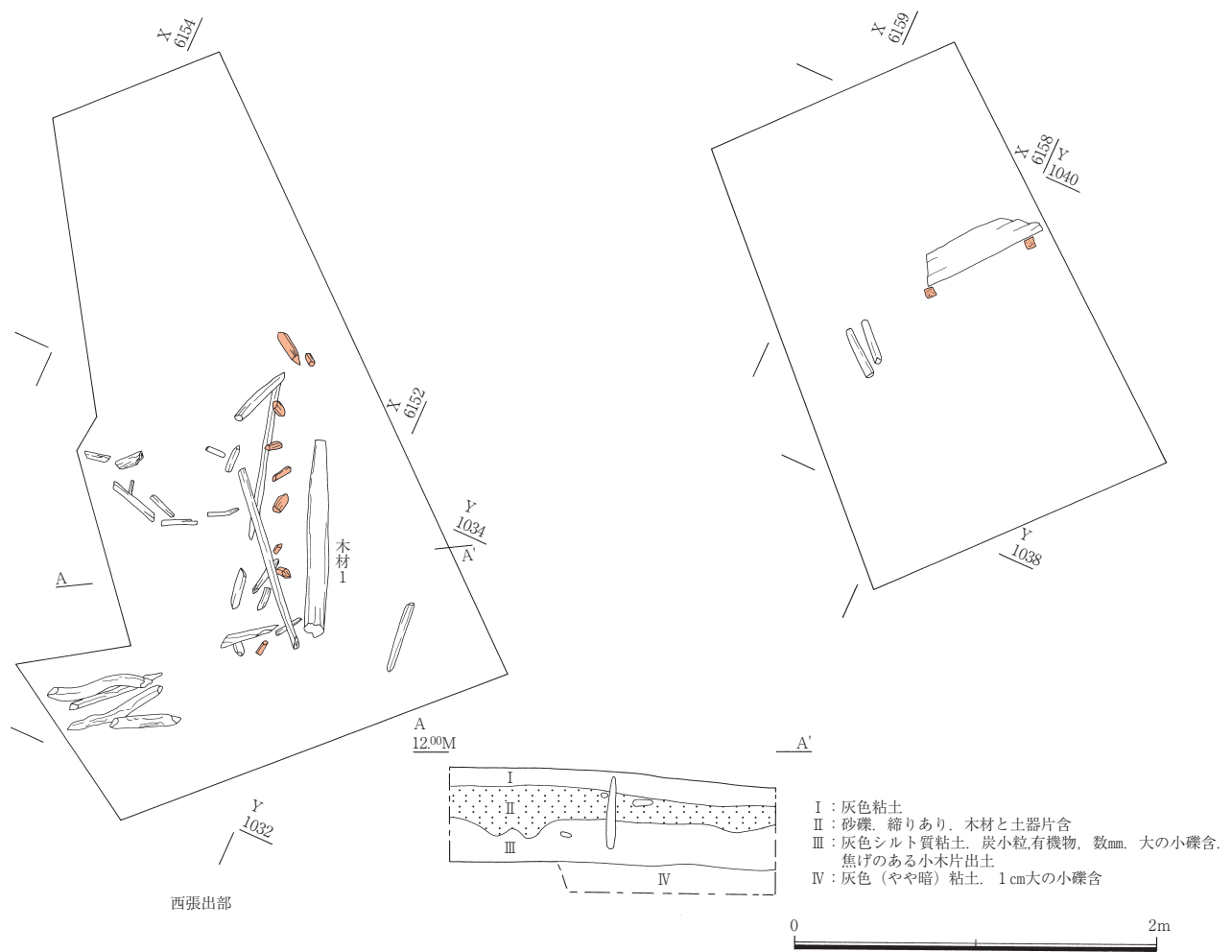


Fig.12 B区張出部 平面・セクション図 (S : 1 / 40)

いたが、Fig.8にあるごとく流路側へ倒れていた。ピットの周囲には、径約10cmと太めの丸杭を含む杭が複数打たれ、杭痕跡とみられる小ピット群もある。横材1の両端は地山に埋め込まれている。当該部のSR4C立上がり部には台形状に凹んだ部分があり、南東側に添う板材の形状と合致している。この板材は流路の立上がり面に密着しており、形状は加工によるものである。なおSR4Cでは、本遺構以南においてのみ底に砂礫が集中していた。以上から、本遺構は水流の制御等に関わっていた可能性が考えられる。

#### (4) ピット

##### SP1

SX2直近の流路底面で検出した。長軸90cm、深さ20cmを測り、埋土は灰褐色粘土質シルトに植物遺体を含むものである。SX2と関連する可能性がある。

##### SP2

SR4Aの底面で検出した窪みで、径46cm深さ29cmを測る。付図1のごとく、付近の流路底などで検出された木材は原位置を留めていないが、本遺構と関連していた可能性がある。

## II. B区

### 1. 調査区の概要と遺構・遺物

試掘坑TP6で、4や6など比較的良好な土器が出土した。さらに「西張出部」とした部分の立会調査で木材群が検出されたため設定した調査区である。Fig.12の各部を含めた木材の検出位置をFig.11に示した。図の「木材」は角材や板材が横位で検出された位置である。当区でも流水による土層の累積が観察されるが、A区のように明確な流路跡や溝跡は検出されなかった。無遺物のⅦ層はA区やTP13でもこれに該当するとみられる土層が確認でき、安定して存在する基盤土層と捉えられる。B区はA区より上流側に位置することから、本層の検出標高が高いものと推定される。本層以下では遺物は出土していない。土層断面N-C-Sにあらわれている立杭は本層を貫通している。また立杭は、南西側に近接するTP7でも1本が検出された。

西張出部の立杭は約4×2cmの角材である。木材1はⅡ層に属し、一端が焦げている。Ⅱ層から土器2片、Ⅲ層から端部の焦げた点け木様の木片が出土している。西隅の枝（枝材の一部か）はⅡ層中に位置する。北の張出部の杭は幅4.5cm、長さ約57cmで、板材片は厚さ2cmを測る。



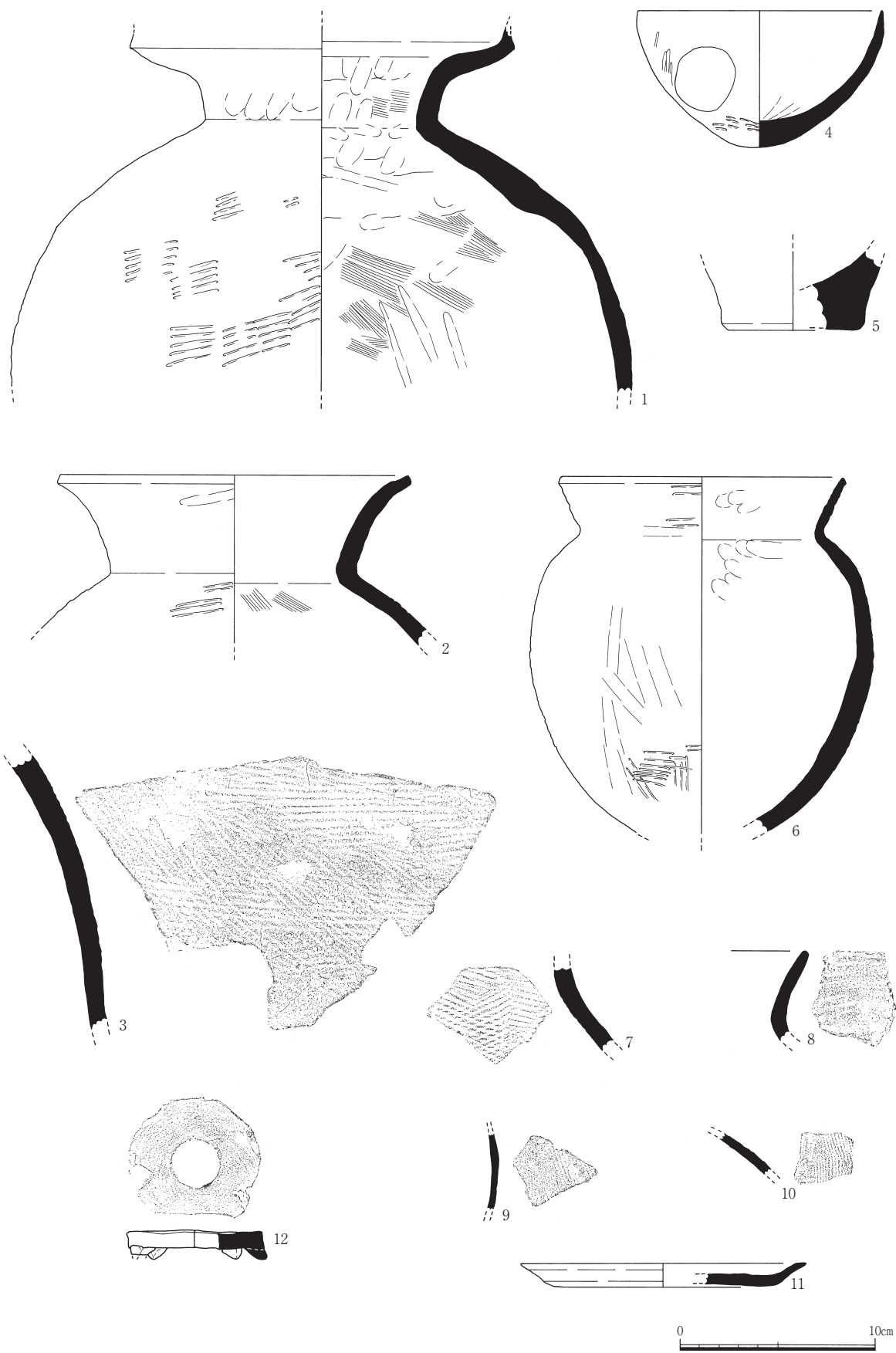


Fig.13 出土遺物 1~12 (S : 1 / 3)

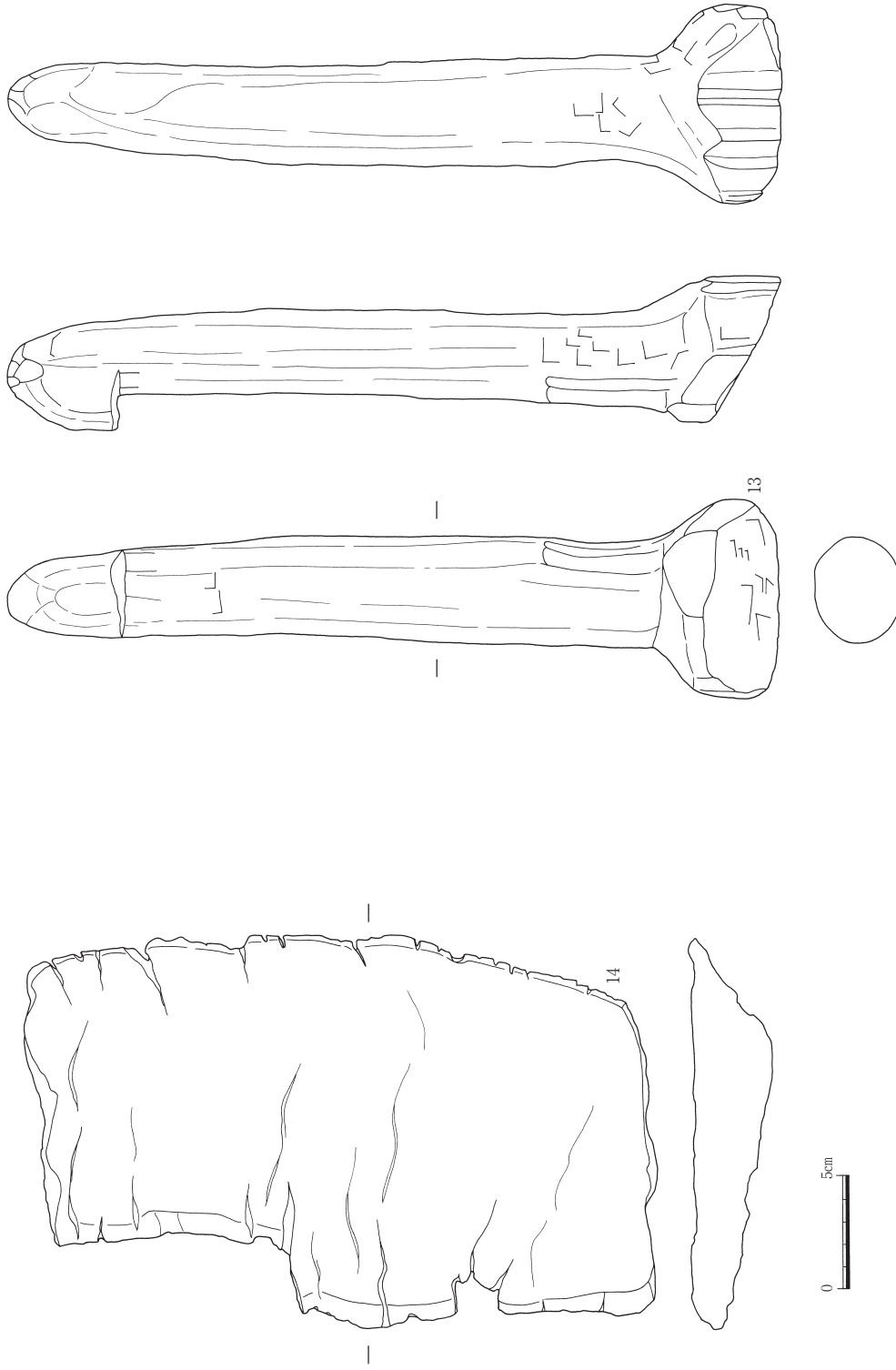


Fig.14 出土遺物13・14 (S : 1 / 2, 1 / 3)

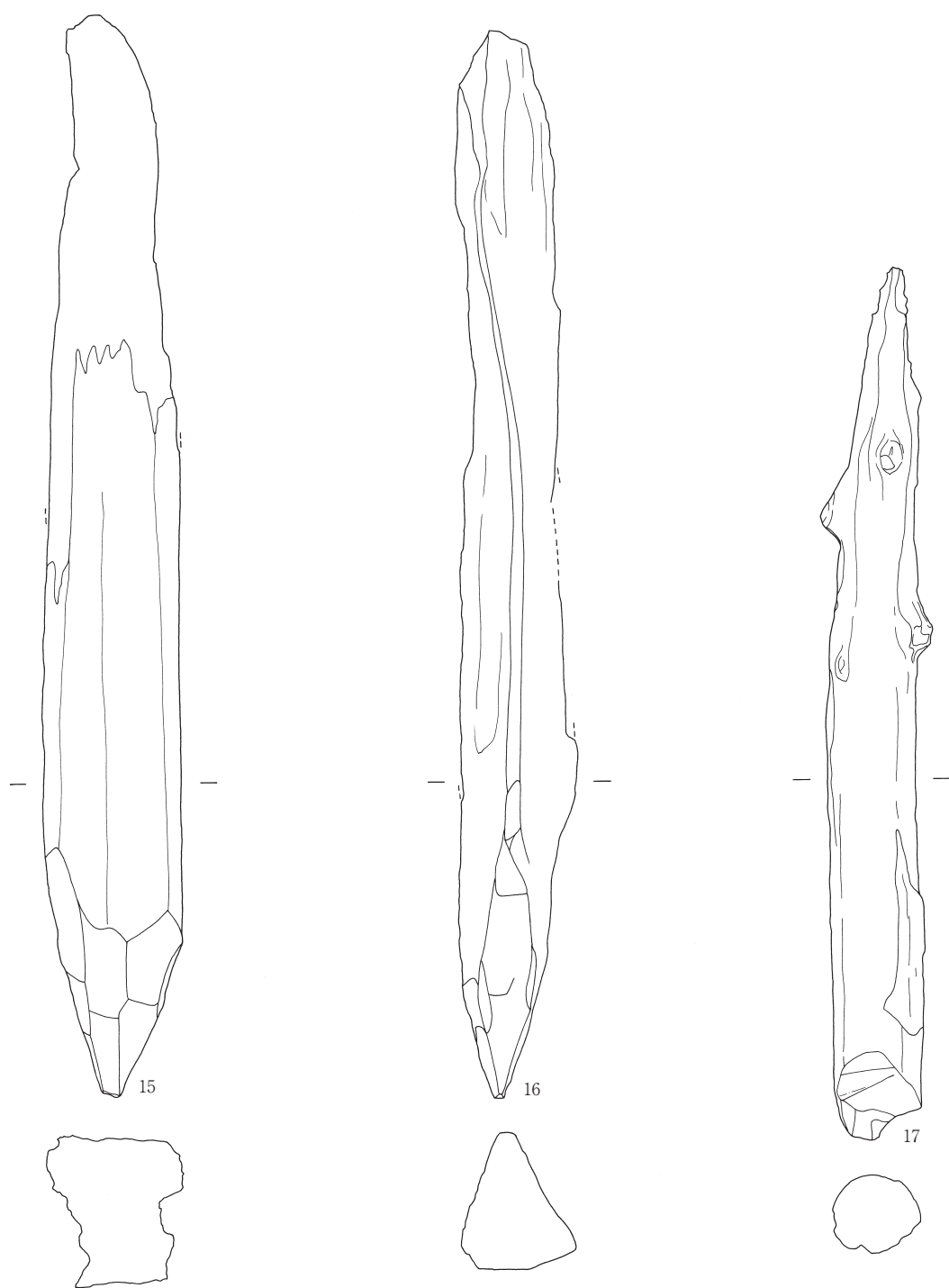


Fig.15 出土遺物15~17 (S : 1 / 4)



Fig.16 出土遺物18~20 (S : 1 / 4)

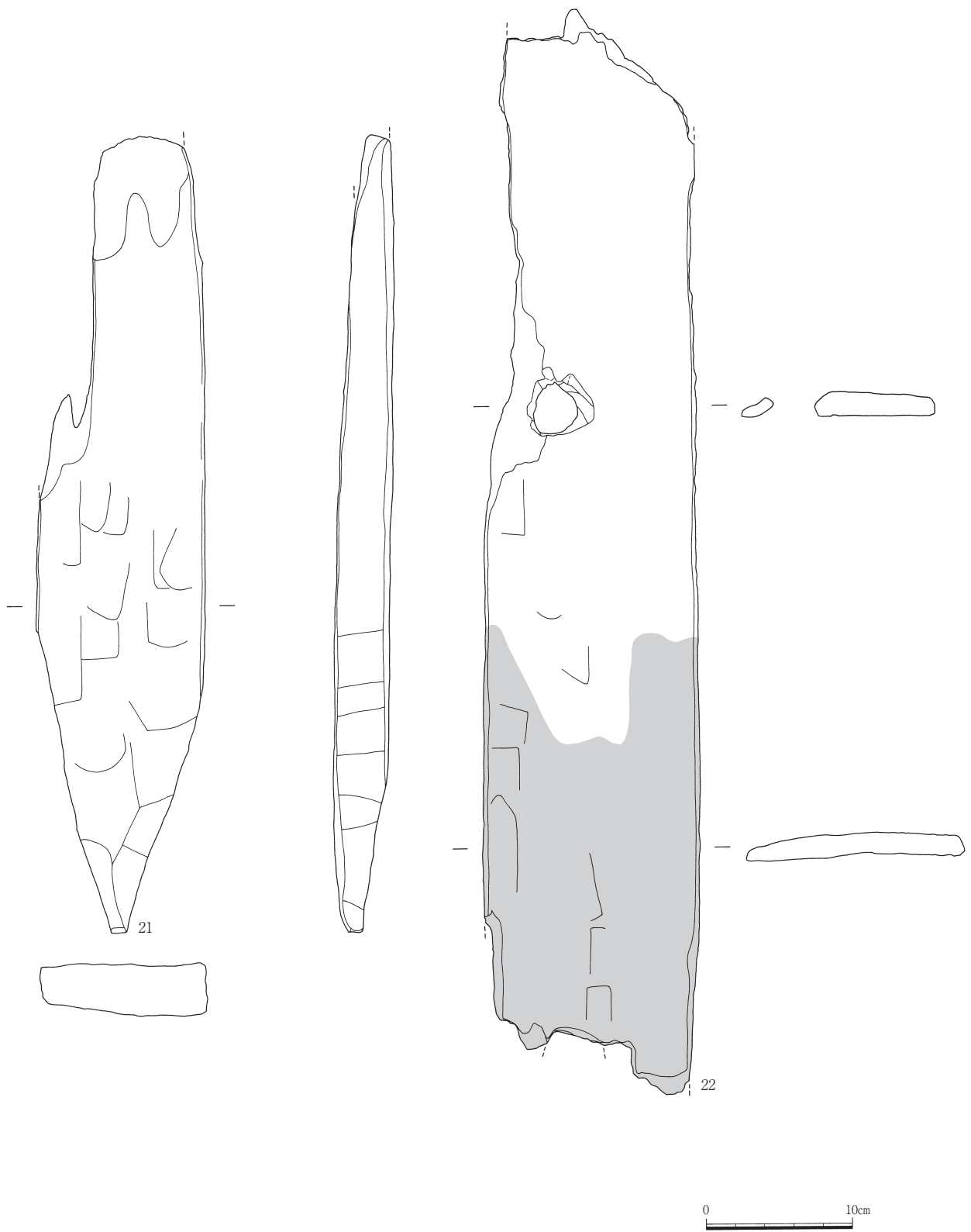


Fig.17 出土遺物21・22 (S : 1 / 4)

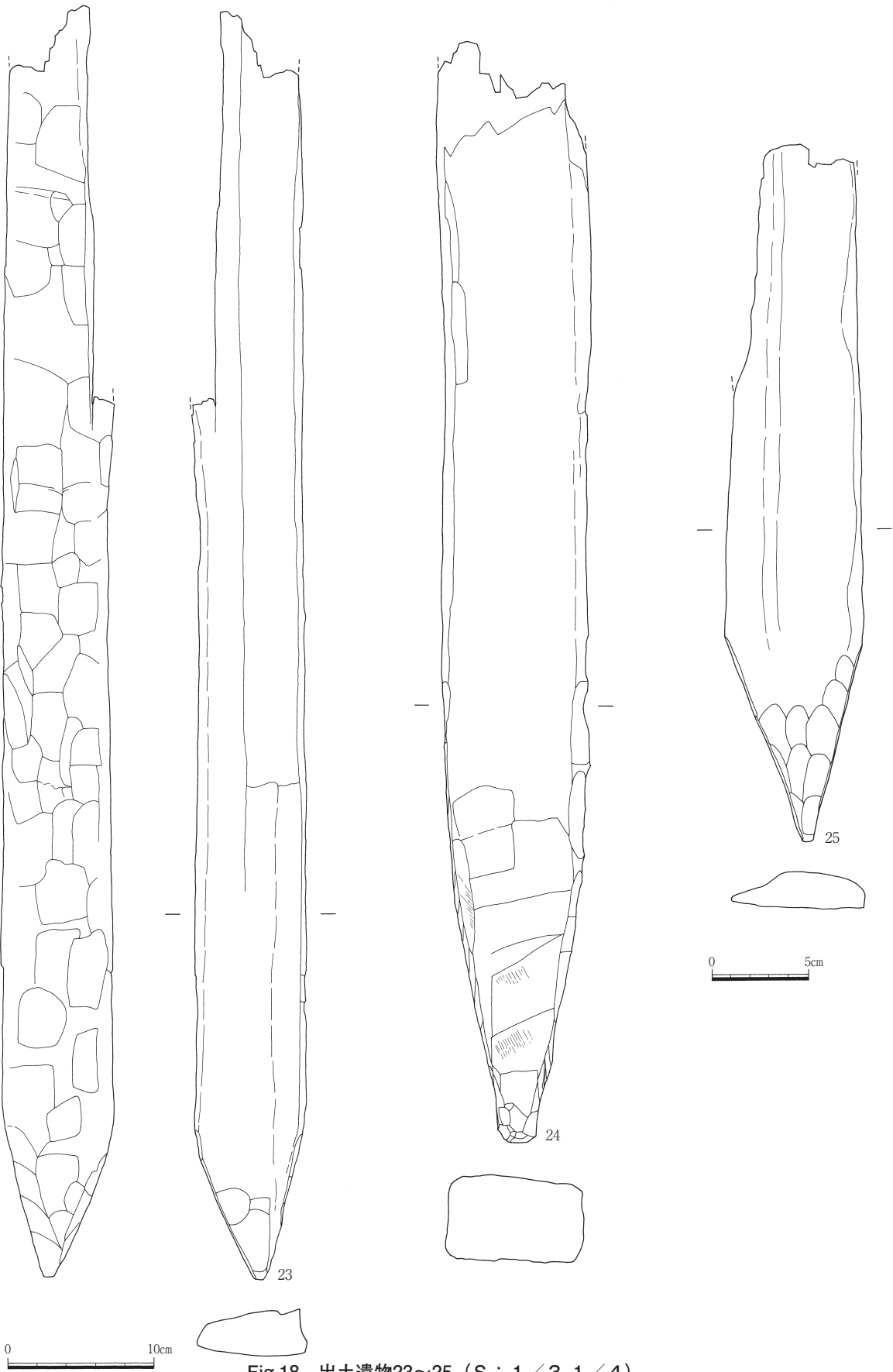


Fig.18 出土遺物23~25 (S : 1 / 3, 1 / 4)

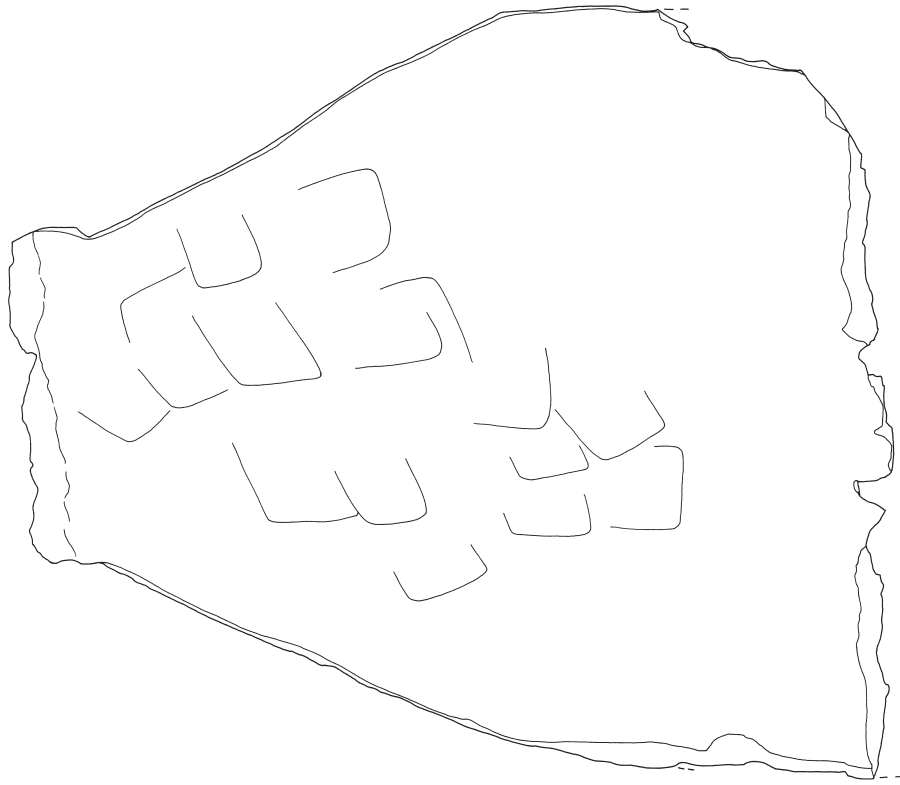


Fig.19 出土遺物26 (S : 1 / 2)

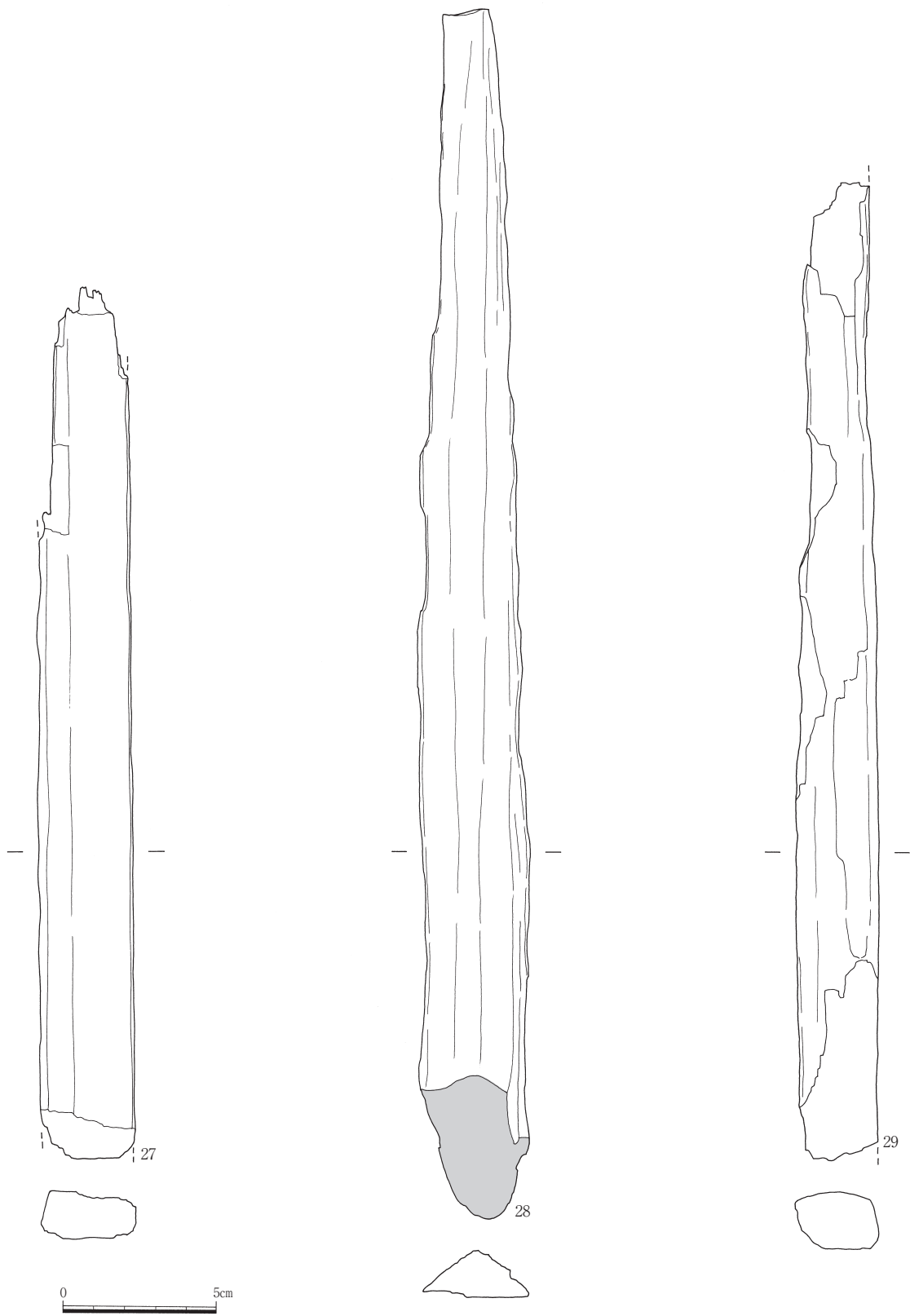


Fig.20 出土遺物27~29 (S : 1 / 2)



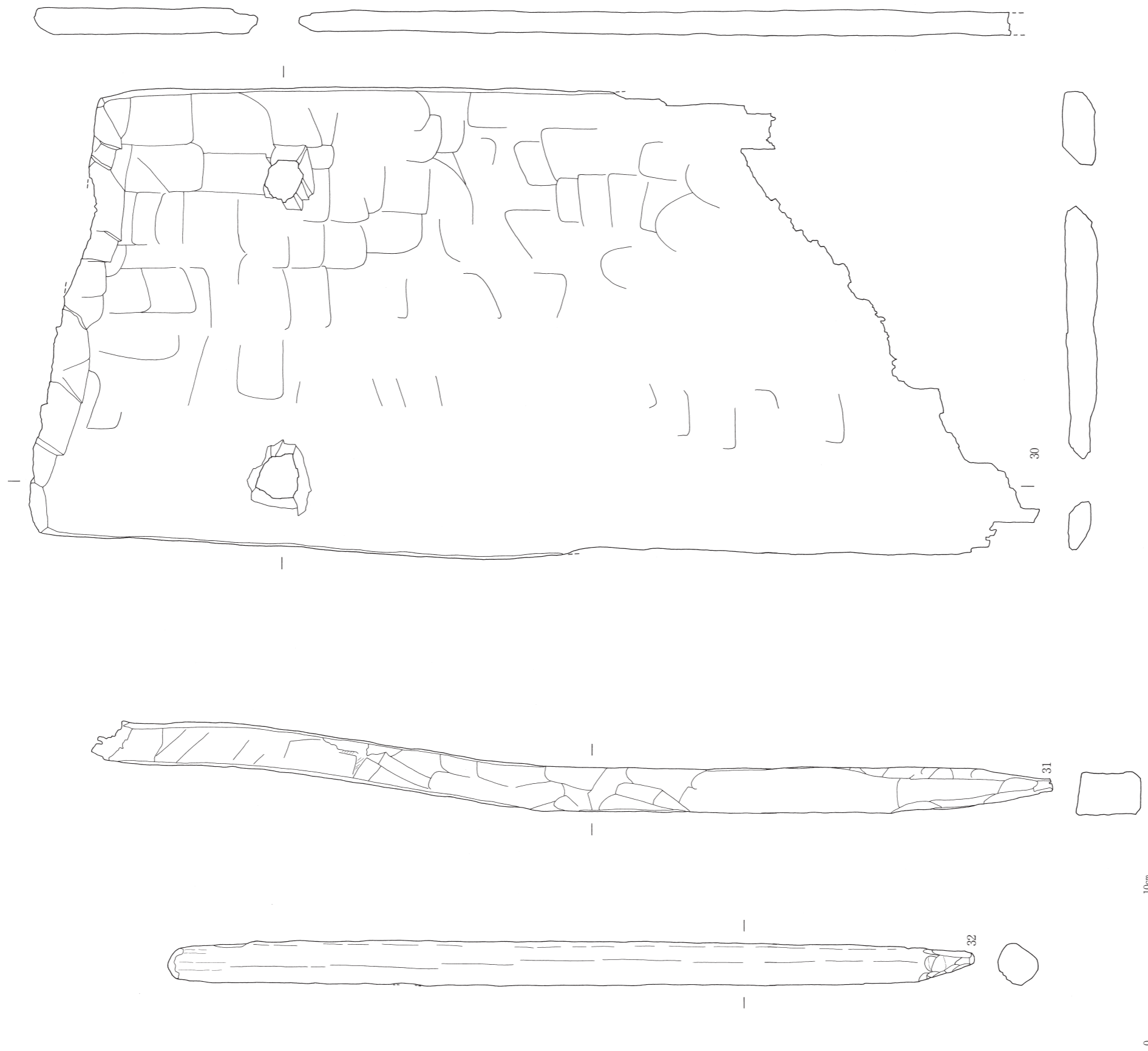


Fig.21 出土遺物30~32 (S : 1 / 3)



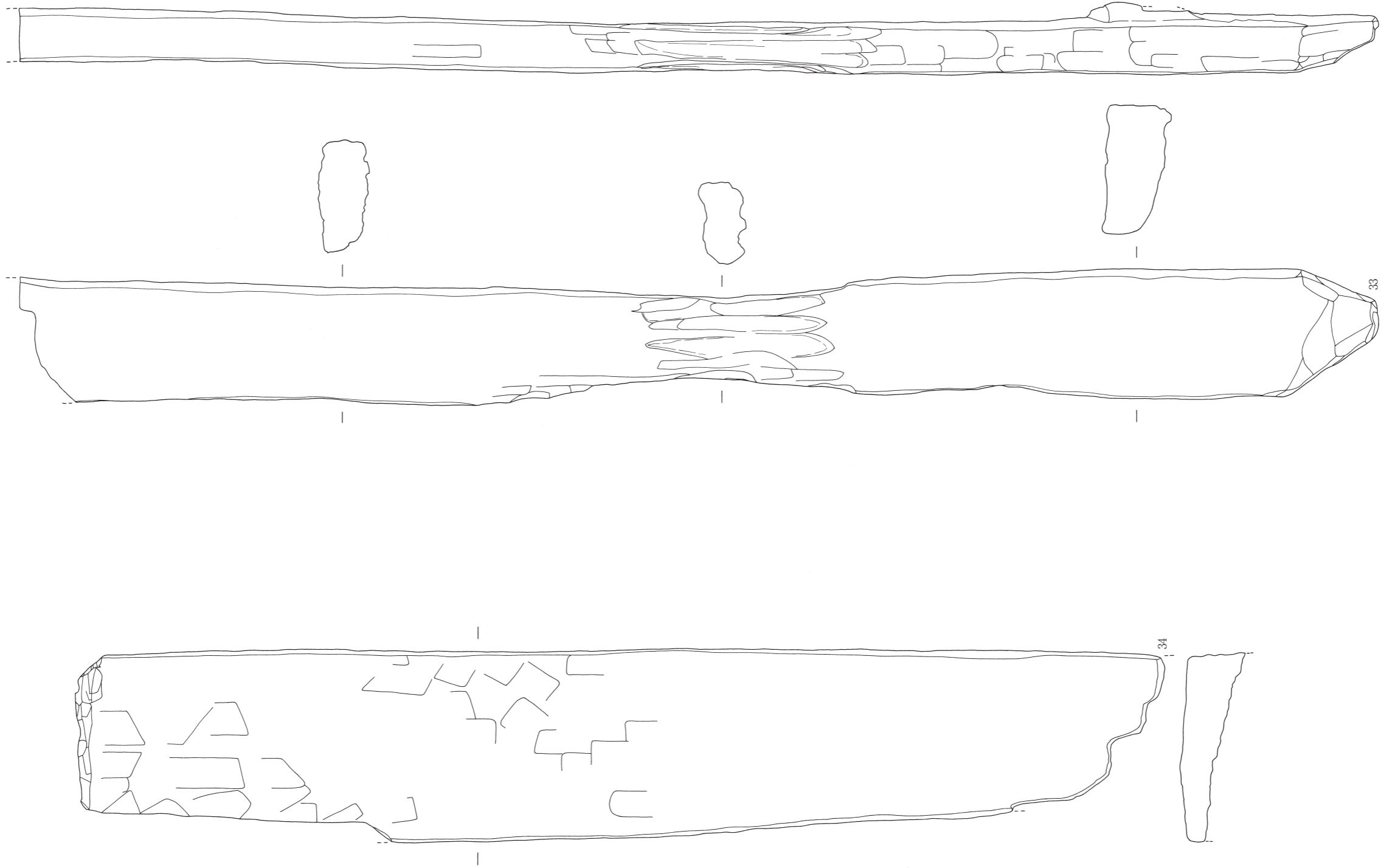


Fig.22 出土遺物33・34 (S : 1 / 4)



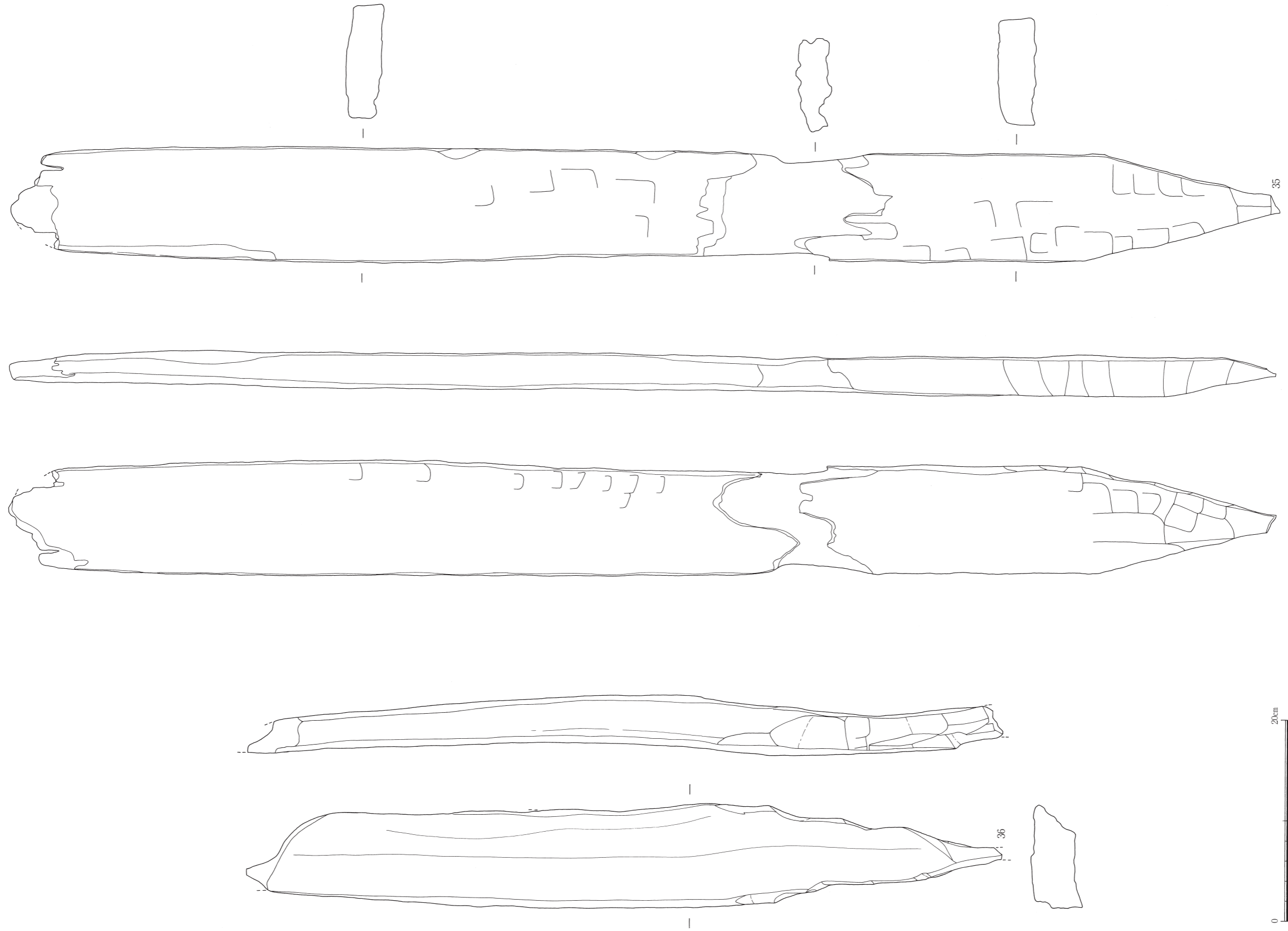


Fig.23 出土遺物35・36 (S : 1 / 4)



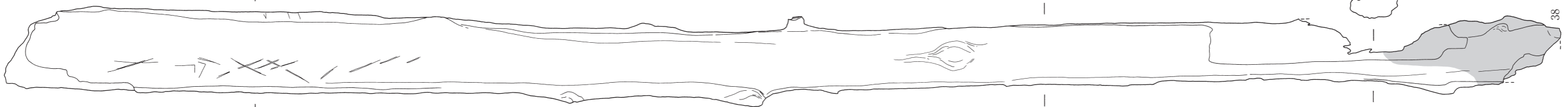
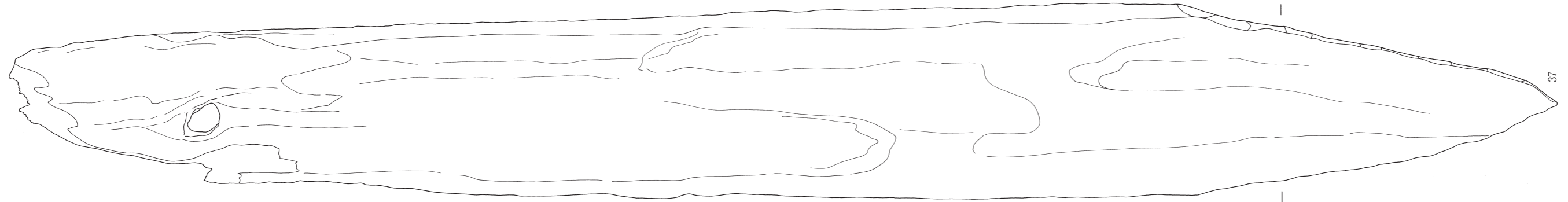
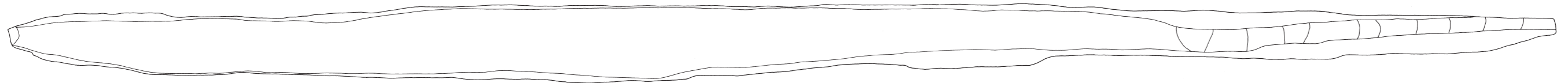


Fig.24 出土遺物37・38 (S : 1 / 4)





## 第4章 まとめ

### 1. 遺構・遺物について

今次調査では護岸や水利に関わるとみられる遺構が検出されたが、中世以前に遡るこのような遺構が、一定規模で確認された例は県下初例である。SR4Aの護岸施設とみられる木材列1は、長さ16mを調査した。丸太の横木、矢板ともに他の木材遺構より格段に大きいものがあり、ホゾ穴に杭を打ったり、木材を組み合わせたりと作りも堅牢である。木材列4は5.4m分を調査し、さらに調査区外へ続く。SR4BやSR4Cも調査区外へ延びている。また、A区から約100m離れたB区でも杭列が検出されるなど、遺構が一定の広がりをもっていることが判明した。TP1で検出された立杭も、同種の遺構の一部である可能性がある。しかし、詳細に関しては必ずしも明確でない点があることを前章で述べた。A区で詳しくみれば、まずSX1は比較的堅牢な構造からみて堰としての機能が考えられる。同時にSR4Aの南岸を形成したものであろう。当該部の諸遺構の先後関係が厳密に確定できていないが、例えばSX1の機能を上記のように仮定するならば、SR7を入念に閉塞した後に再びSR4Bを構築することには矛盾があり、その場合、SR7埋没後にSR4B構築、SX1により合流部を閉塞、木材列1と共にSR4Aの兩岸を形成、といった経緯が想定できる。

木材列2には2列の丸杭列が含まれ、木材列5とも何らかの関係を持っているが、それを含めた機能が課題である。木材列5は、今次の調査区内では最も本流性が強いSR4Aを横断していることが注意され、丸太材を矢板や板杭で挟み込むような構造にも特徴がある。矢板の残存全長は50～80cmで、上端は丸太材より25～35cm程度上方へ突出している。位置からみて、SR4Aの水位を増すか、あるいは分流して、木材列5の南方や木材列4方向への取水を促進する機能が想定可能である。

また、木材列1、3と4や、SR4AとSR4B杭列の軸方位が直交することも留意される。SR4Bは、南東方向へ斜行する旧流路SR7を矯正するかのようには杭を使用して構築されている。これらの事象からは構築に際しての企画性が看取され、上記の遺構展開範囲の広がりと併せて、一帯に土地利用プランが存在したことを示唆する。

以上のように、細部で確定の難しい部分もある中で、要点を確認しておくと、1) A区において、低湿地環境→SR6・5→SR4→SD1と辿る変遷。木材列等にも作り変えがあり、複数時期が想定できる、2) 各所で直線や直交を意識したプランが認められる、3) このような属性を持つ遺構が広範囲に展開している、といった事柄があげられよう。

次に遺物の出土状況についてみると、出土した土器は調査面積に比して多くはないが、古墳時代以前に遡るものについてはA区、B区・TP6ともに木材遺構に伴って出土する傾向にある。A区では木材列やSX1に伴っており、そのことに人為性があるのか、水流による偶発的なものかは判断が難しいが、概して顕著な磨耗はみられない。なお、A3区におけるSR4A北岸の木材列1に伴う遺物番号1は、口縁部を欠いた上半部が集中的に検出されており、廃棄位置を保っていたものとみられる。また、遺構に使用されている木材には角材、板材、丸太材があり、部位によって選択的に用いている。材や使用位置によって寸法が似通っており、木材列2の板材においては幅が一定である。

今回検出された諸遺構の構築に際しては、大量の木材が用意されたこととともに、中には転用材

とみられるものもある。これらは遺構を営んだ集団における木材加工に関する情報を提供している。樹種としては、類似した遺構が認められる他遺跡ではクリ、コナラ、クヌギ等の使用例があるが（兵庫県埋蔵文化財調査事務所2003）、本遺跡では本書付編のごとくスギやヒノキがみられる。肉眼観察でも角材や板材では整った柾目様の木目がみられるものが全体に少なくない。ただし、樹種調査を行っていない木製品のうち、比較的小径の丸材をそのまま使用した杭などは主に広葉樹とみられる。

出土した土器については数が少なく、言及できることも限られるが、実測できたものからみて在り土器編年のヒビノキⅡ～Ⅲ式の範疇で大過ないと考えられ、弥生時代末～古墳時代初頭頃に比定できる（岡本1982）。9や10は胎土、焼成、器壁厚のいずれもが在り土器とは明確に異なる。畿内方面からの搬入品と考えられ、上記の在り土器の時期とも齟齬がない。今次調査では、県下の他遺跡と比べて、この種の搬入品の出土比率の高さを指摘できる。なお、やや遡る時期の弥生土器が試掘坑も含めて包含層から少数出土しているが、これらはいくらか磨耗しているものが多く、廃棄場所がやや離れていることを示唆する。

搬入品について周辺の遺跡をみると、安芸川東岸の勇前遺跡では讃岐産土器が3器種揃って出土しており、弥生後期前葉に比定されている（森田・久家2002）。また清水寺岡遺跡では、住居跡から石鏃や多量のサヌカイト剥片が出土している。今次出土の搬入品とは時期も産地も異なるが、発掘調査例が少ない中でこのような事象がみられることが留意される。

## 2. 他遺跡との比較

県下に類例がないので、比較対象は他県の例となる。既述のような資料解釈上の限界を認識した上で、それらを参照すると、まず伊丹市の岩屋遺跡で幅10数mを測る河川性流路に設置された堰や護岸施設が検出されており、それらの「付属施設」とされる杭列も報告されている。「付属」する杭列は堰や護岸施設本体に斜交しており、今回の木材列2と1付近の構造との関係が留意される。同遺跡の所属時期は弥生前期後半とされている（兵庫県埋文調査事務所2003）。福岡市の比恵遺跡では、10数m幅の規模が推定される河川性流路の岸に沿ってから流路中央部へ向かう木材集積遺構において、横木に先端加工した材を直交させてその頭部をたて架ける構造がみられ、SX1との共通性がみられる。同遺構の所属時期は弥生末～古墳初頭に比定されている（福岡市教委2004）。横木に直交して材をたて架ける構造は先記の岩屋遺跡の堰遺構でもみられ、横木とその支保材を骨格とする点もSX1に類似する。

## 3. 桜木遺跡の変遷

概要を通観すると、まずA区で遺物を含む土層のうち、最古の層はSR6の埋土である。遺物のほとんどは木材片である。この段階では、低湿地環境の中に、緩やかな立上りを呈する自然流路SR6・5がみられた。時期比定の可能な遺物は出土していないが、木材片や埋土からみてSR4と隔絶した時期とは考え難い。SR7も、概ね本段階に属する可能性がある。次のSR4段階では、多量の木材を使用して流路の幅や方向を設定・整備し、護岸を施す。木材遺構は何度か作り変えられ

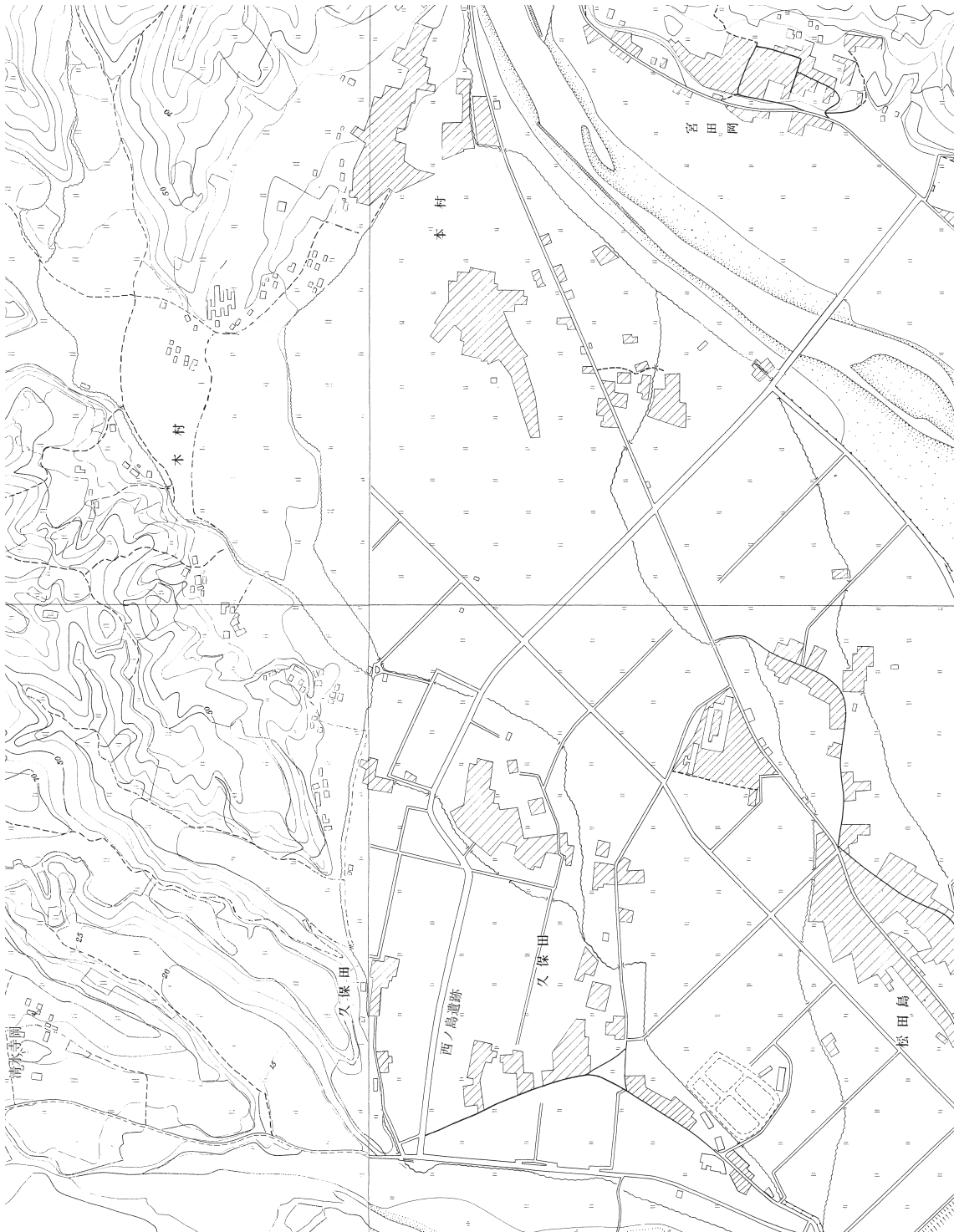


Fig.25 周辺地形図 (S : 1 / 10,000)

ており、整備プランが変更されたり、補修が継続して行われたことを示す。続くSD1は木材遺構を伴わないが、明確に掘削された断面形を呈する。本溝跡は砂礫層によって一時に埋没したまま廃棄されており、より上位の層や流路跡からは須恵器7や土師質土器皿11が出土していることからみても、SD1埋没後に遺跡としての断絶があるとみられる。11は、形態・手法・口径からみて9世紀後半から10世紀初頭頃に比定できる(註)。古墳後期ないし古代に比定できる遺物は、B区や試掘坑をあわせてもこの2点のみであり、該期の集落の中心は遠ざかっているものとみられる。

次に地形図より、当地の地理的環境の中に本遺跡を位置付けてみる。Fig.25は北半が耕地整理前、南半は現況の地形図を使用して合成したものである。「1962年測図，1987年修正」の高知県発行森林基本図を使用した。本図とFig.3より、東方からA，B区方向へ向かう流路状の痕跡が看取でき、見谷川を含む小河川や伊尾木川派流の旧流路，あるいは氾濫原や後記の「潟湖」北縁の旧地形等が反映されている可能性が考えられる。また同痕跡の位置や方位は今回検出したSR4のそれと齟齬がなく、今次検出された流路跡等をそのような関係性の中で理解できる可能性がある。上記痕跡に反映された旧地形の時期に言及できる材料はないが、本遺跡の南側に低湿な土地が広がっていたことは首肯でき、今次検出した遺構は、そのような土地を生産域として整備していく過程を示すものと捉えられる。

#### 4. 安芸平野の遺跡の動向

本遺跡周辺の遺跡分布については第1章で略説したが、弥生中期後半以降の遺跡が平野周縁部の丘陵や山裾部に分布しており、本遺跡に近い高士山遺跡，山田山遺跡もそれに含まれる。

これらに続く時期の発掘調査例としては、これまでジョウマン遺跡の事例があり、5世紀前半に比定される遺物と溝跡が検出されている（出原2003）。同遺跡は平野部の自然堤防上に立地する。また本遺跡から程近い西ノ島遺跡は、現見谷川が安芸川に合流する地点に所在する低湿地遺跡で、古式須恵器をはじめ手捏ね，勾玉，磨製・打製石斧，石鏃，多数の木杭が粘土採掘時に出土している（安芸市1980）。これらの事例より、弥生時代以前の当平野部では安芸川や伊尾木川の影響が大きく、概して生活に適した環境ではなかったことが推測され、「潟湖」を想定する見方もある。ジョウマン遺跡や西ノ島遺跡の事例は、古墳中期に入って人の活動領域に変化がみえていることを示しており、安芸川の自然堤防の発達を指摘する見方もある（出原2003）。今次の桜木遺跡の成果は、このように従来ほとんど空白であった時期に該当しており、生産域を整備していく活動の一端を知ることができる。

本章に関して、上田健太郎氏（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）の協力を得た。末尾ながら、記して感謝申し上げます。

（註）池澤2000のⅡ－2期に比定できる。

#### 参考文献

『安芸市史』安芸市役所 1980年

岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古希記念・古文化論集』下 1982年

池澤俊幸「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究XV』日本中世土器研究会 2000年

森田尚宏・久家隆芳『勇前遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2002年

出原恵三「第四章 まとめ」『ジョウマン遺跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2003年

『岩屋遺跡現地説明会資料』兵庫県埋蔵文化財調査事務所 2003年

『比恵33』福岡市教育委員会 2004年

表3 桜木遺跡出土遺物観察表1

## 《土器》

Fig. 遺物 No - No.	出土地点 遺構, 層, 他	器種	器形	部位	法量(cm)				特徴	色調			備考
					口径	器高	胴径	底径		内面	外面	胎土	
14-1	A 3区 SR 4 A 北岸	土師器	壺	口頸部	-	[18.6]	-	-	内面(口)ナデ、ハケのちナデ(胴上)ナデ(ハラナデ)(胴中)ハケのちハラナデ 外面(口)ナデ(胴)タタキのちナデ 口縁は外反して広がり、端部で短く外反し上方乃至外上方に立ち上がる。胴部は球形を指向する。	にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR7/6	灰 7.5Y6/1	
14-2	A 3区 SD 1	弥生土器	壺	口頸部	17.8	[8.6]	-	-	内面(口)ナデ(胴)ハケのちナデ 外面(口)ハケのちナデ(胴)タタキ:頸部周辺にタテハケが残る。 口縁は外反して外上方に立ち上がる。口唇は外傾する面を成す。	灰黄 2.5Y7/2	浅黄 2.5Y7/3	灰白 2.5Y8/2	
14-3	A 3区 SR 4 B-5層	弥生土器	壺	胴部	-	[13.9]	-	-	内面(胴)ナデ 外面(胴)タタキのち粗ハケ 胎土中に粗砂~砂粒を含む。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	浅黄橙 10YR8/3	
14-4	TP 6 VIII層	土師器	鉢	-	12.6	7.0	-	-	内面ナデ(ハラナデ) 外面(口)タタキのちナデ:一部にハラミガキ、剥落する。 丸底。口縁は内湾して上方へ立ち上がる。口唇は細く丸く修める。	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/3	灰白 2.5Y8/2	
14-5	TP 6 IX層	弥生土器	甕	底部	-	[4.0]	-	6.6	内面(底)ナデ? 外面(底)ナデ? 平底。中央がやや窪む。	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄 2.5Y6/2	
14-6	TP 6 VIII層	土師器	甕	-	14.3	[18.1]	17.6	-	内面(口)ナデ、押圧痕(胴)ナデ、ハラナデ 外面(口)タタキ(胴)タタキのちハラナデ 口縁は直線的に外上方に立ち上がる。口唇は外傾する丸味を持った面を成し、外側へやや肥厚する。頸部屈曲はやや急。胴部は球形指向。	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	にぶい褐 7.5YR5/3	一部に煤 付着
14-7	A 1区 VII or VIII層	須恵器	甕	胴部	-	[4.2]	-	-	内面(胴)タタキ 外面(胴)ナデ:一部に自然釉が掛かる。 胎土は良くガラス化する。裂・円孔が多く見られる。	灰白 7.5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	灰白 N8/	
14-8	A 3区 SD 1	土師器	甕	口縁	-	[4.6]	-	-	内面(口)ナデ 外面(口)タタキのちナデ 口縁は緩く外反して外上方に立ち上がる。口唇は丸く修める。頸部は緩く曲がる。	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	灰白 7.5Y7/1	
14-9	A 3区 SR 4	土師器	甕	胴部	-	全長 [3.8]	-	-	胎土中に雲母粒を含む。	オリーブ黒 7.5Y3/1	暗灰 N3/	オリーブ黒 5Y3/1	
14-10	A 3区 SD 1 下層	土師器	甕	胴部	-	[3.0]	-	-	内面(胴)ケズリ 外面(胴)ハケ 胎土中に角閃石を含む? 搬入品	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	黒褐 2.5Y3/2	
14-11	A 3区 SR 3-2層	土師器	皿	-	14.8	1.2	-	10.4	内面 回転ナデ 外面(口)回転ナデ 極浅い皿、または蓋。口縁は水平な面を成し、外側へ張り出す。口唇は丸く修める。	にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/3	灰白 5Y8/1	
14-12	TP 9 II層 下層	窯道具	足付き ハマ	直径	6.9	高さ 1.5	厚さ 0.9	-	中央部分は直径2.4cmで割り貫かれる。足は5個の粘土塊を貼付して成す。	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	灰白 N7/	

表4 桜木遺跡出土遺物観察表2

《木器・木製品》

Fig. No.	遺物 No.	出土地点 遺構, 層, 他	器種	器形	法量 (cm)			特徴	備考
					全長	全幅	全厚		
15-13	A 1区	Ⅸ最下層	部材		226	5.8	4.6	先端は鈎状を成す。断面楕円形で、基部は多角形に加工する。	
15-14			-	盤状木製品	274	16.9	3.5	主面を平らに仕上げる。段面形は逆台形を呈す。木根を利用?	
16-15	A 2区	木材列1	土木材	杭	64.5	8.1	8.9	断面方形の柱材を転用し、先端を尖らせる。	
16-16		〃	土木材	杭	62.6	6.7	8.1	丸太材を打割して断面三角形の材を作り、先端を加工する。	
16-17	A 2区	木材列2	土木材	杭	51.2	5.2	4.6	先端に2方向から調整を加えて辺を作り出す。	
17-18		〃	農工具	-	88.4	6.3	5.3	断面方形の柄穴2孔(4.5×?cmと2×1.5cm)を穿つ。	
17-19		〃	土木材	杭	85.1	5.3	5.8	丸太材を用いて端部を加工する。	
17-20		〃	-		86.1	5.6	6.2	断面台形。先端には加工が認められない。	
18-21		〃	土木材	杭	54.3	11.4	3.7	やや厚めの板材で、端部に大きな加工単位を残す。	
18-22		〃	-	板状木製品	73.8	14.8	1.9	端部を凹状に加工する。中央に直径4.4cmの穿孔部。裏面に加工痕が多く残る。	
19-23	A 1区	木材列3	土木材	杭	86.7	7.6	3.2	表面は調整を多く施して、平らな面に仕上げる。端部は両側面に削りを加えて尖らせる。	
19-24		A 1区	土木材	杭	75.5	10.2	6.2	断面形は長方形で、端部を4面から削り出し尖らせる。工具の刃部跡が顕著に残る。	
19-25	A 1区	木材列3	土木材	板杭	35.8	7.1	2.0	表面は荒い面(破断面)を成す。調整は両主面(表面がやや密、裏面は粗)と二側面に加えられる。一端部を尖らせる。他端部は破断し欠損する。	
20-26		A 3区 SR 4 or 6	農工具	エブリ鋏?	23.3	20.5	2.2	断面形は楔形を成し、端部は自然面状に太く残す。	
21-27		A 3区 SR6	-	板状木製品	28.3	3.1	1.5	加工は不明瞭。	
21-28		〃	炭化材		39.3	3.7	1.5	断面三角形で、材の一部。	
21-29		A 3区 SR 6 or SD 2	-	板状木製品	31.6	2.7	1.8	製品の一部。	
22-30	A 3区	木材列1	農工具	板状木製品	66.0	30.8	2.1	端部は荒く斜めに削り出す。左右の側面寄りに一辺約2.5~3cmの不整形な穿孔部が存在する。幅3cm前後の整状工具を用いて浅い丁寧な削りを実施す。	
22-31	A 3区	SX 2	土木材	杭	62.7	3.0	4.2	表裏面には、不規則な調整痕が残される。残された両側面は概ね破断面。端部は細かく尖って仕上げる。	
22-32	A 1区	木材列4	土木材	杭	52.6	2.7	-	硬質。播粉木状木製品の転用か。一端部は丸味を持ち、他端は尖って仕上げる。段面形は円形から不整形円形を呈す。	
23-33	A 2区	木材列2	土木材	杭	118.1	9.7	4.4	断面長方形で両側面から調整を加えて尖らせる。中位には抉りを加える。	
23-34		〃	-	板状木製品	94.6	16.4	5.6	断面長方形で、主面に加工痕を多く残す。	
24-35	A 2区	木材列1	土木材	杭	126.2	11.3	3.7	断面長方形。両側面と先端で、両主面から調整を加える。中央では摩滅する。	
24-36		〃	土木材	杭	75.0	10.2	5.2	断面四角形の材を主に両側面から加工する。	
25-37	A 3区	木材列1	土木材	杭	141.4	17.8	7.1	断面長方形で、側面から調整を加え尖らせる。板状を成し、表面には2ヶ所の大きな剥離部分が存在する。裏面は大きく抉れる。	
25-38	A 1区	木材列4	土木材	杭	142.0	9.2	5.2	断面方形で、一面に調整を加える。	
30-39	A 3区	木材列1	建築材	柱	300.6	13.5	14.6	15×5cmの規模で柄穴を穿つ。大部分は剥落して、本来は規模を留めない。	

# 桜木遺跡出土木製品の樹種調査結果

株吉田生物研究所

## 1. 試料

試料は高知県桜木遺跡から出土した祭祀具1点、土木材1点、用途不明品4点の合計6点である。

## 2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作成した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

## 3. 結果

樹種同定結果（針葉樹3種、広葉樹1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

### 1) コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* S. et Z.)

(13)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柁目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で1分野に1～2個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州（福島以南）、四国、九州（宮崎まで）に分布する。

### 2) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(23・30・32)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柁目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1～3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

### 3) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(24)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柁目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科コナラ属アカガシ亜属 (Castanopsis sp.)

(26)

環孔性放射孔材である。木口では孔圏部の道管（ $\sim 300 \mu\text{m}$ ）は単独でかつ大きい。接線方向には連続していない。孔圏外に移るに従って大きさを減じ、放射方向に火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織はおおむね平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は大型で柵状の壁孔がある。板目では多数の単列放射組織が見られる。シイ属にはツブラジイとスダジイがあるが、ツブラジイに見られる集合～複合放射組織の出現頻度が低い。為区別は難しい。シイ属は本州（福島、佐渡以南）、四国、九州、琉球に分布する。

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）  
島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社（1982）  
伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所（1999）  
木村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）  
深澤和三「樹体の解剖」海青社（1997）  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」（1985）  
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」（1993）

使用顕微鏡

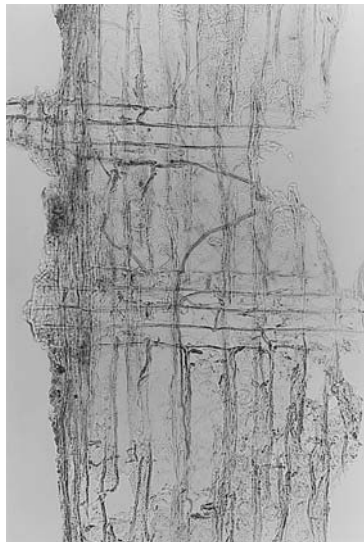
Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

桜木遺跡出土木製品同定表

遺物No.	樹種	木取り
13	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ	板目材
23	スギ科スギ属スギ	板目材
24	ヒノキ科アスナロ属	柾目材
26	ブナ科シイ属	板目材
30	スギ科スギ属スギ	板目材
32	スギ科スギ属スギ	柾目材



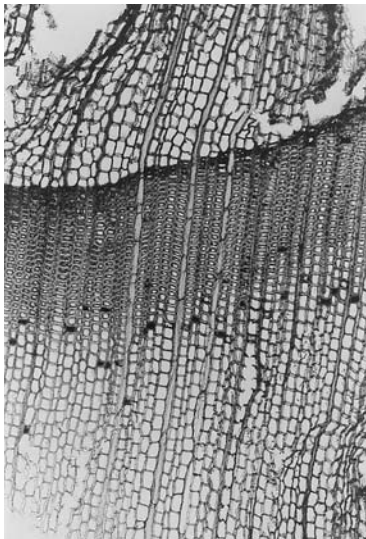


柁目×100



板目×40

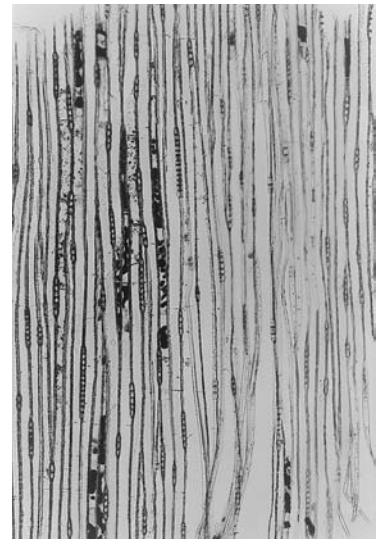
13



木口×40

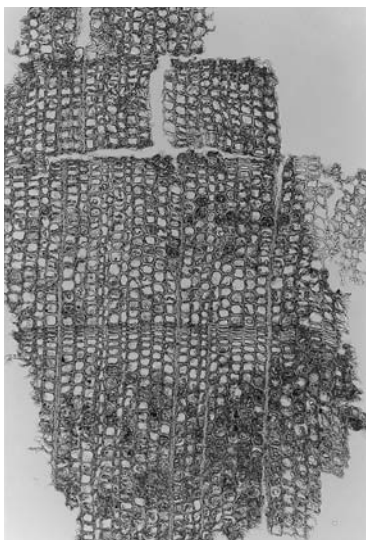


柁目×100

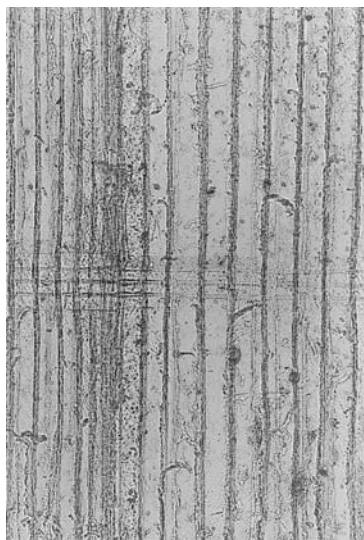


板目×40

23



木口×40

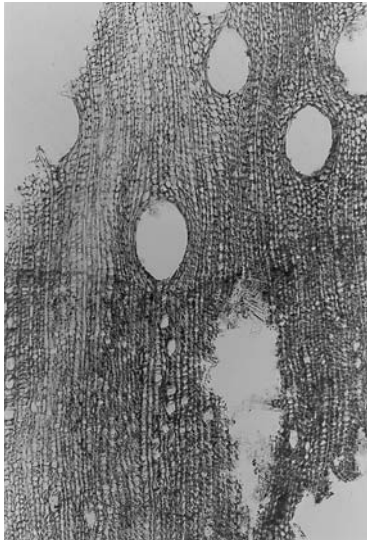


柁目×100



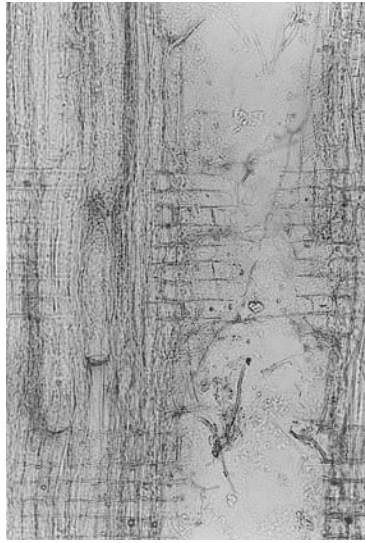
板目×40

24

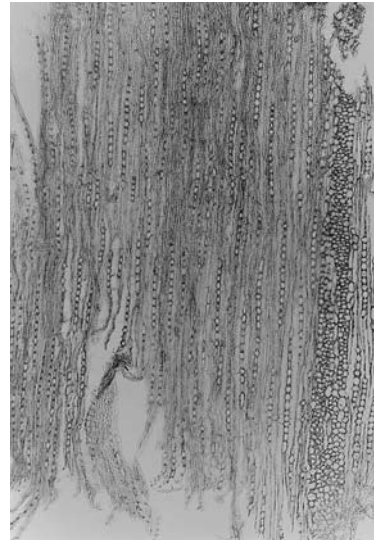


26

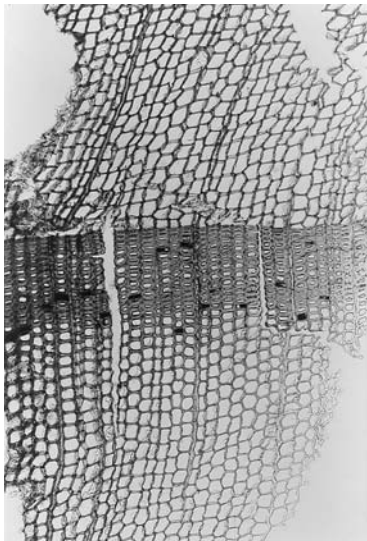
木口×40



柁目×100

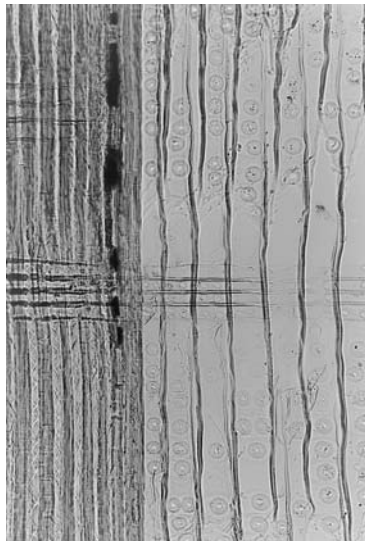


板目×40

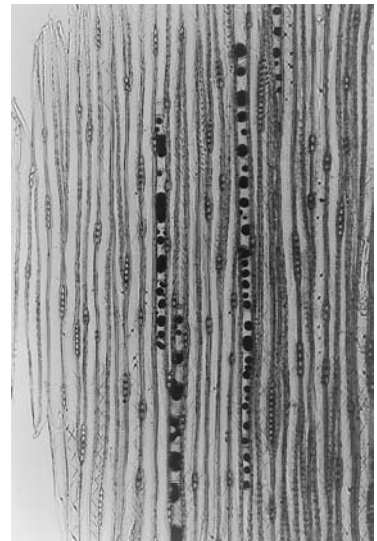


30

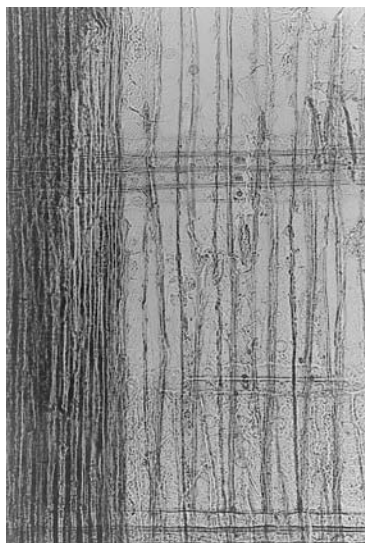
木口×40



柁目×100



板目×40



32

柁目×100



板目×40

# 写真図版





A1区 調査状況（北より）



A1区 木材検出状態（南より）

PL. 2



A2区 木材出土状態（北より）



A2区 調査状況（西より）

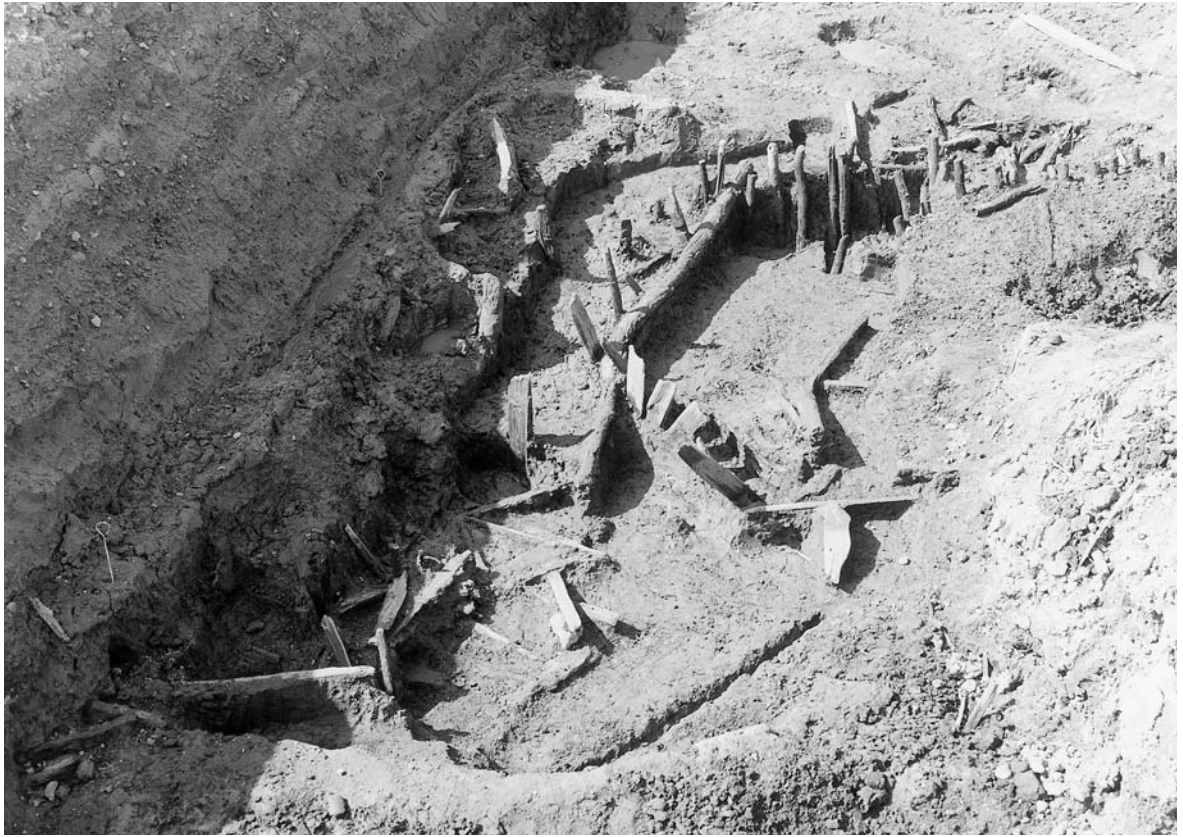


A2区 完掘状態（北より）



A2区 木材列2（北より）

PL. 4



A2区 (北より)



A2区 木材列5 (西より)





SD1 A3区 検出状態 (西より)



SD1 完掘状態 (西より)



SR4 A3区 (西より)



同上 (東より)



SX 1 (北より)



SX 1 上層木材除去状態 (北東より)



SX 1 上層木材除去状態（西より）



SR 4 A 北岸 壺（1）出土状態、木材組合せ状態（南より）



A3区 SX2, SP1・2付近出土状態(西より)



SX2 出土状態(西より)



SX2 埋土除去状態（東より）



同上（北より）



SR6 A3区 出土状態 (西より)



同上 (東より)



バンクB SR4 A, SR5 セクション (南西より)

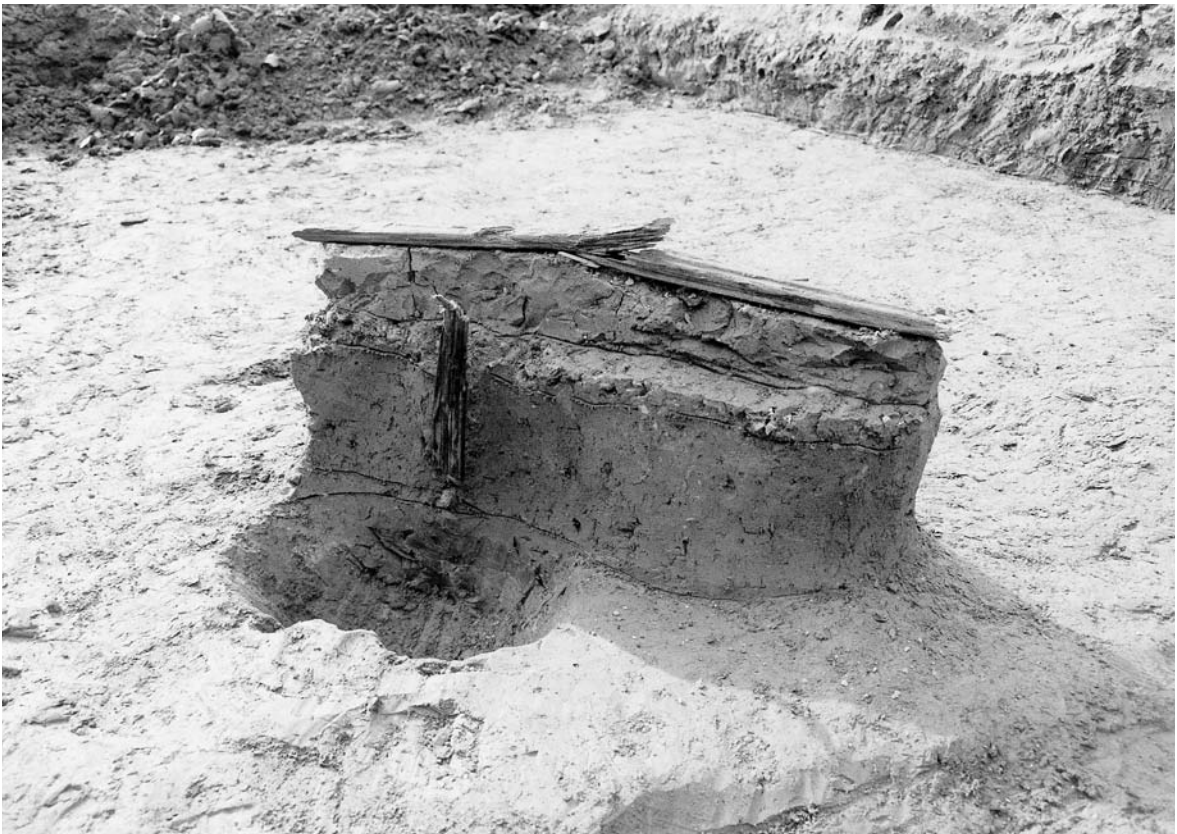


SR6 A2区 木材出土状態 (西より)





B区西張出部 杭と板材の出土状態（南東より）



B区南部 杭と板材の出土状態（東より）

PL. 14



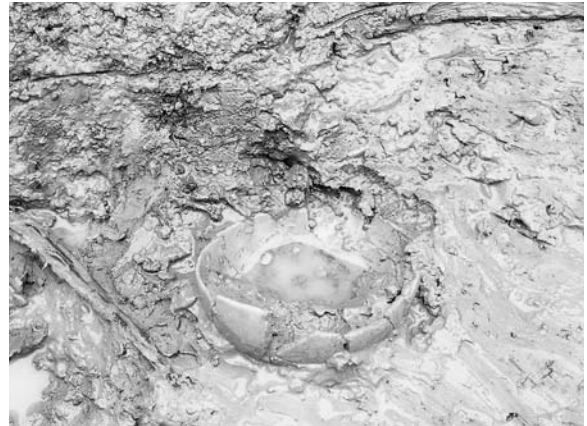
A 2区下層 杭 (SR4) が木材 (SR6) を貫通



A 3区 SR4北岸 板と横材の組合せ (東より)



A 1区 25と土器



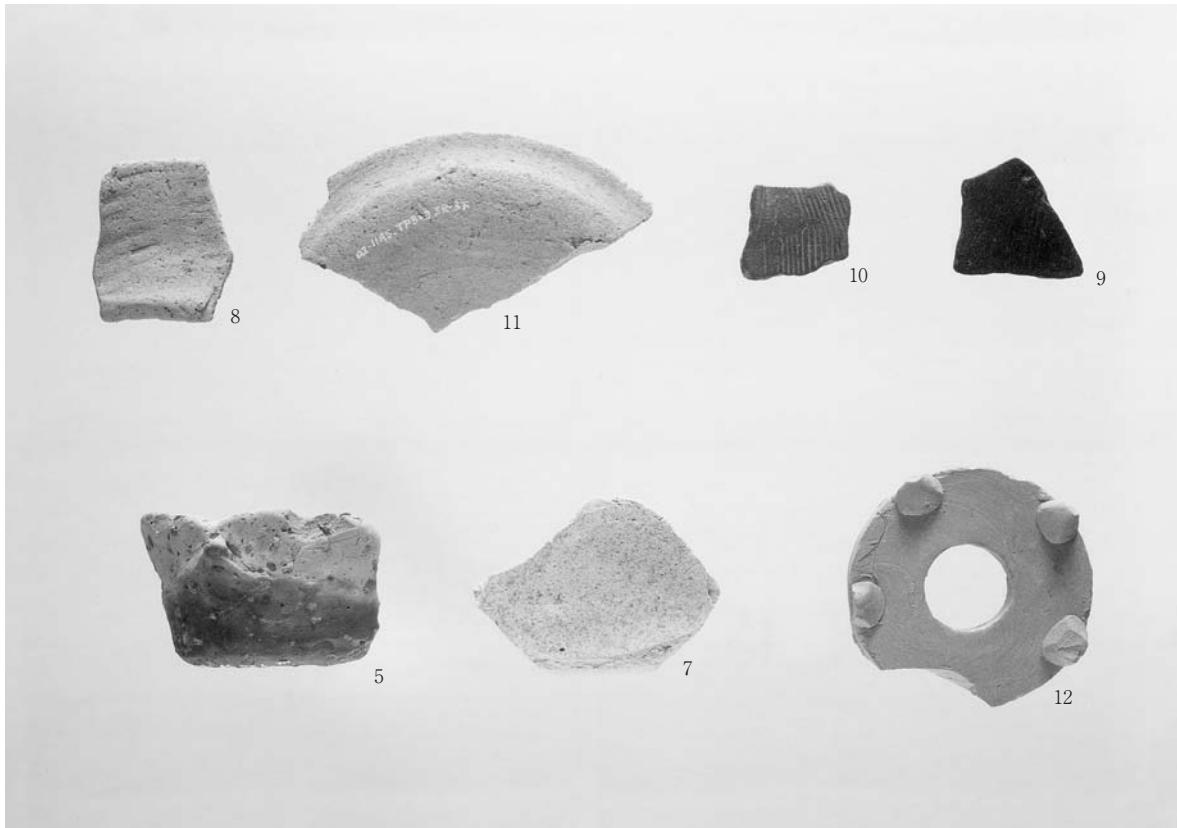
TP6 鉢 (4) 出土状態



SR 4 A北岸セクション (バンクB)



A 3区 現地説明会 (2003年2月1日)



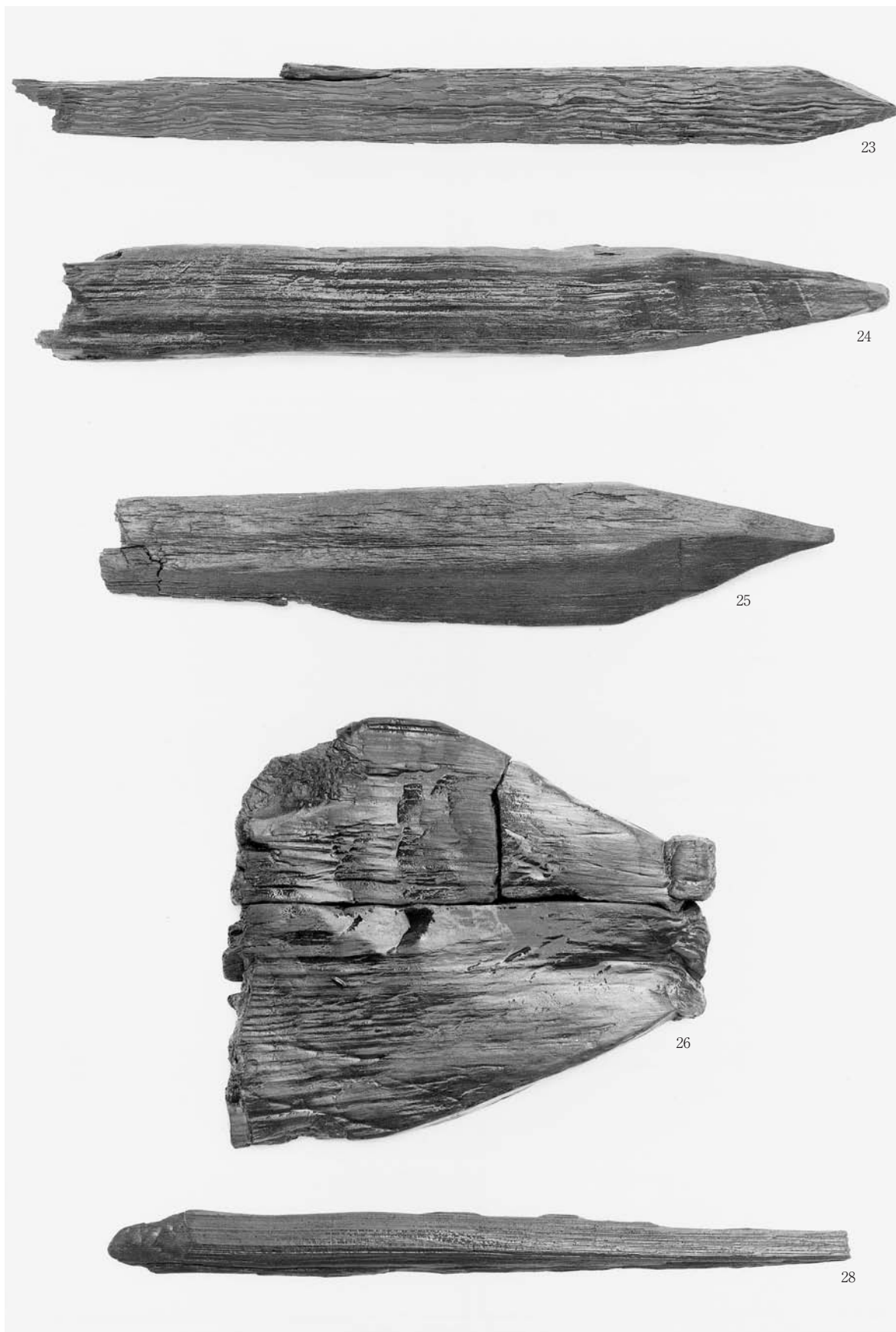
出土遺物 1



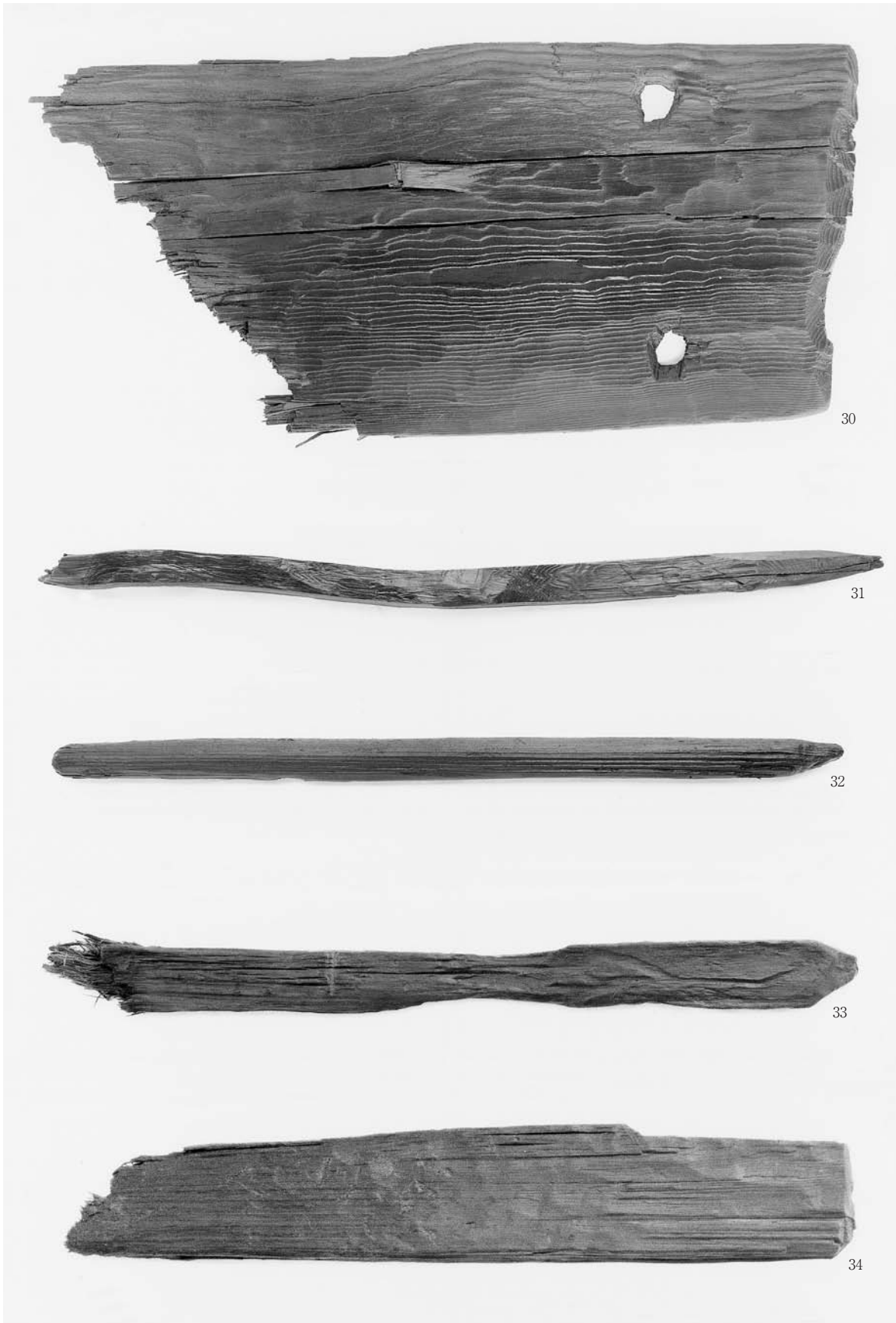
出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4



出土遺物 5

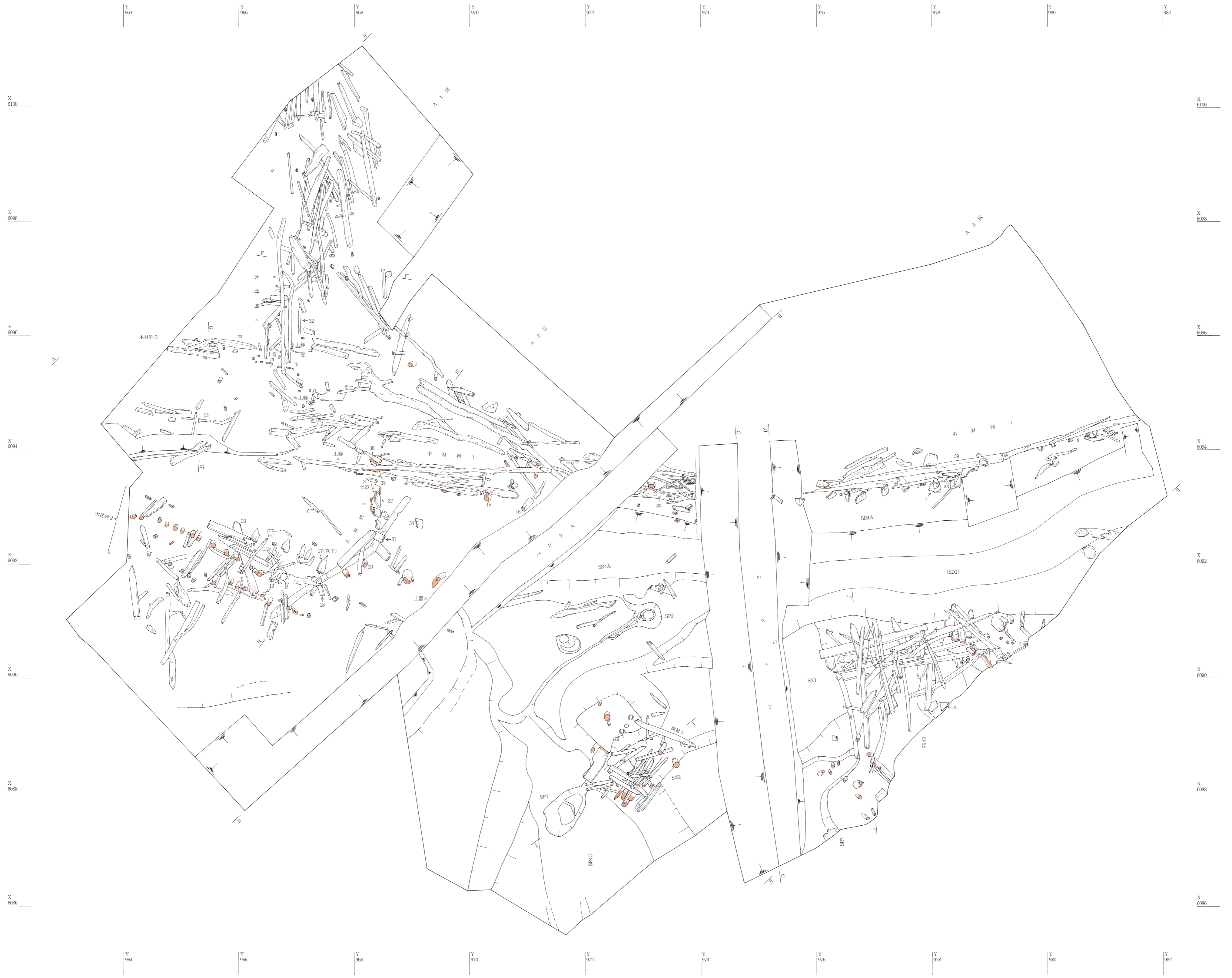


出土遺物 6



## 報告書抄録

ふりがな	さくらぎいせき							
書名	桜木遺跡							
副書名	見谷川災害関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第94集							
編著者名	池澤俊幸・藤方正治							
編集機関	財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437-1 TEL088-864-0671							
発行年月日	2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さくらぎいせき 桜木遺跡	こうちけん 高知県 あきし 安芸市 かわきた 川北	39203	30066	33度 30分 17秒	133度 55分 34秒	20020513 ) 20030428	453	見谷川河 川災害関 連工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
桜木遺跡			水路遺構、土留め 遺構、木材集積遺 構、ピット	弥生土器、土師器、土師 質土器、須恵器、窯道 具、木製品、木材				



付图1 A区 平面图 (SR4等) (S: 1/40)

Y  
964

Y  
966

Y  
968

Y  
970

Y  
972

Y  
974

Y  
976

Y  
978

Y  
980

Y  
982

X  
6100

X  
6100

X  
6098

X  
6098

X  
6096

X  
6096

X  
6094

X  
6094

X  
6092

X  
6092

X  
6090

X  
6090

X  
6088

X  
6088

X  
6086

X  
6086

Y  
964

Y  
966

Y  
968

Y  
970

Y  
972

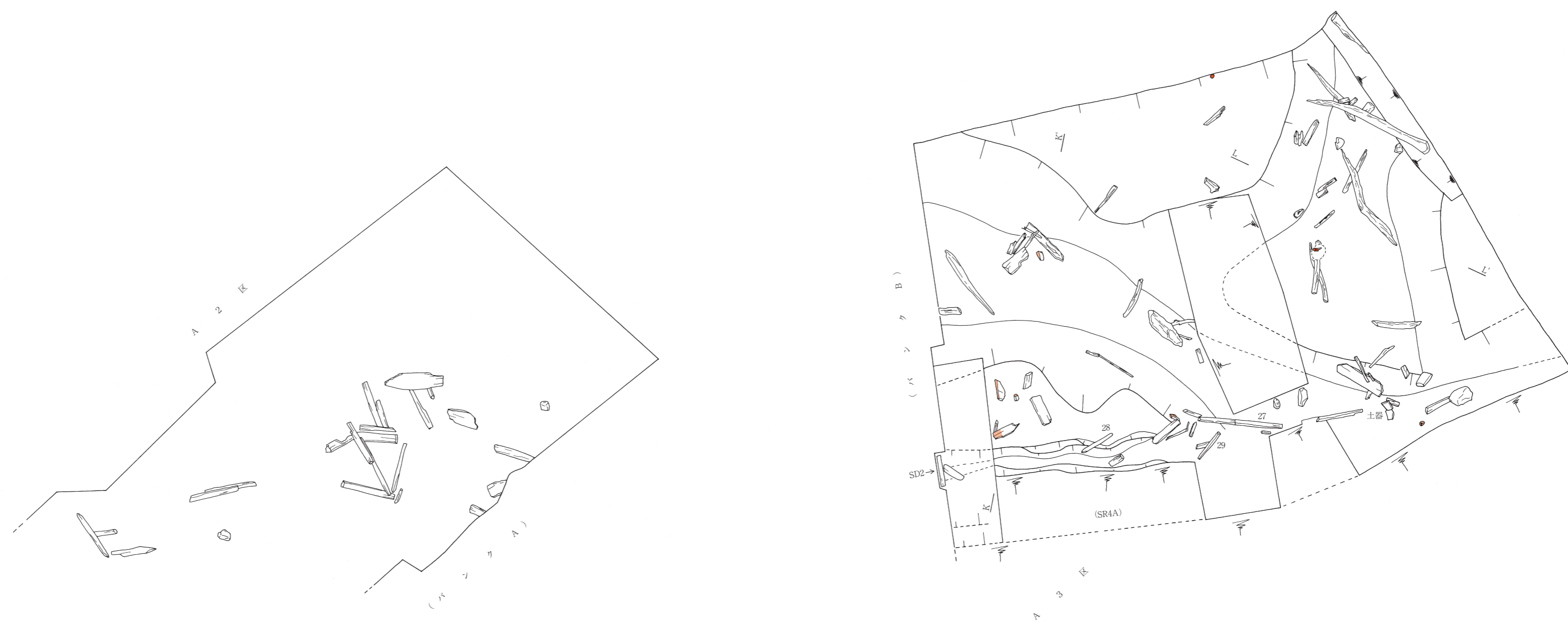
Y  
974

Y  
976

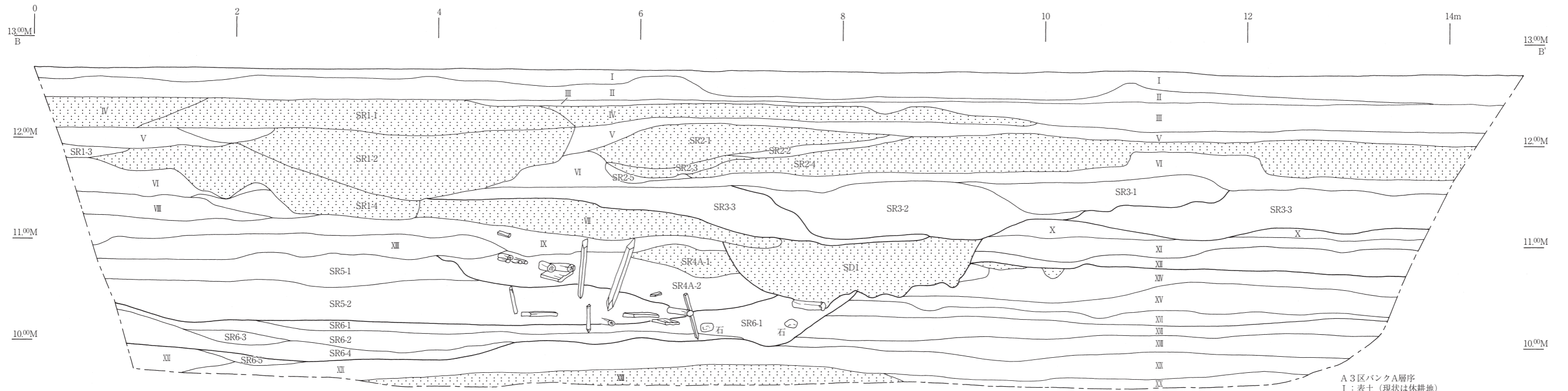
Y  
978

Y  
980

Y  
982

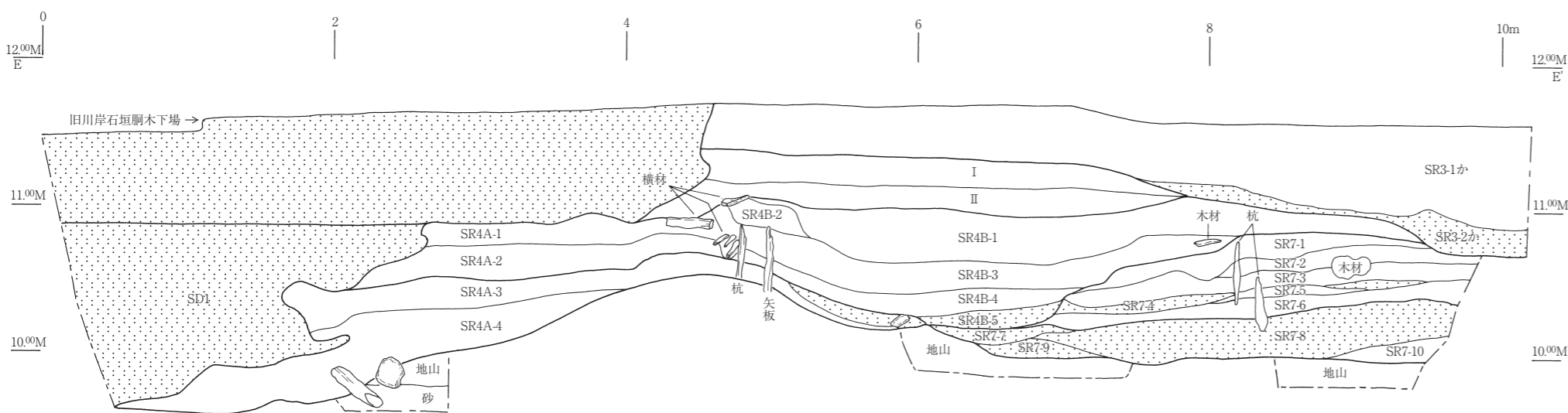


付図2 A2・3区 下層平面図 (SD2・SR6) (S: 1/40)



A3区 バンクA

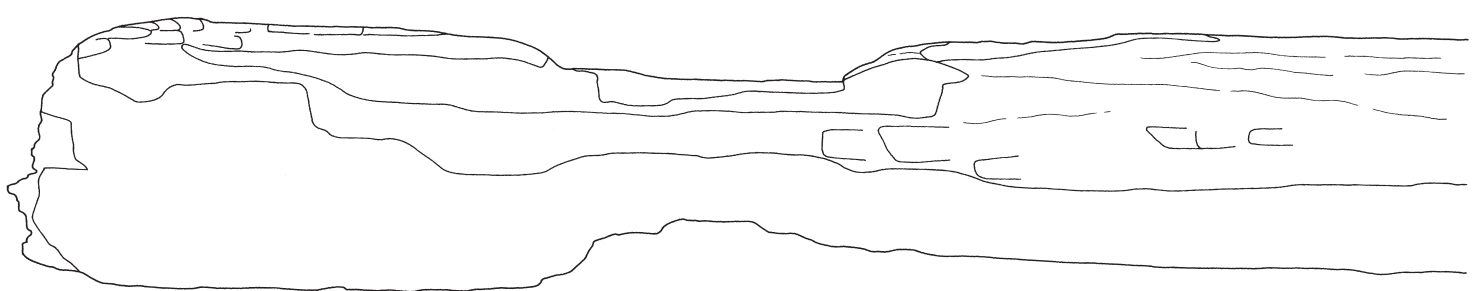
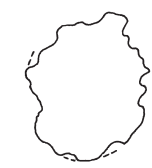
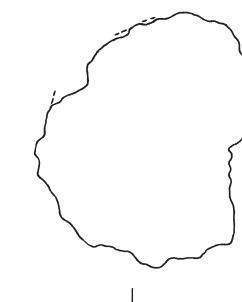
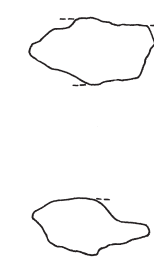
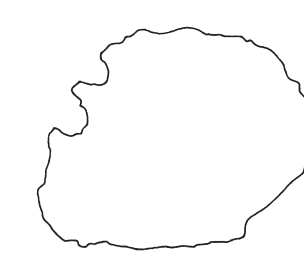
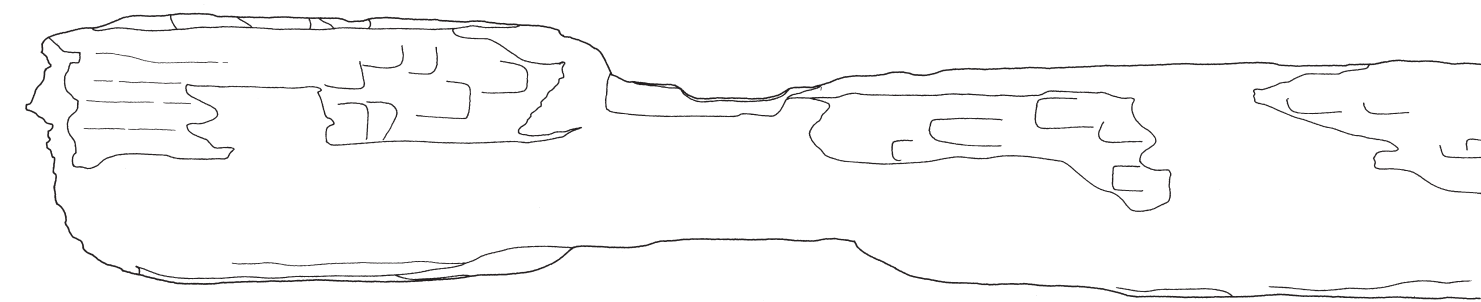
- A3区バンクA層序
- I: 表土 (現状は休耕地)
  - II: 旧耕作土. 灰色粘土質シルト
  - III: 旧耕作土. 粘土質シルト. 上半黄褐色, 下半灰色
  - IV: 砂~数cm大の礫
  - SR1-1: 砂~10数cm大の礫
    - 2: 砂~10数cm大の礫 (橙~褐色)
    - 3: 粘土~小礫
    - 4: 砂~10数cm大の礫 (砂多め・灰色)
  - V: 黄灰色粘土~シルト
  - SR2-1: 砂~数cm大の礫
    - 2: 灰色粘土質シルト
    - 3: 砂礫
    - 4: 砂~2,3cm大の礫
    - 5: シルト~小礫
  - VI: 暗灰色粘土
  - SR3-1: 灰色粘土に7cmまでの礫多く含
    - 2: 砂礫と粘土~シルト
    - 3: シルト~細砂
    - 4: シルト~細砂に炭化物多めに含
  - VII: シルト~小礫
  - SD1: 砂礫
  - VIII: 灰色粘土. 砂を塊状に含
  - IX: 灰色粘土
  - X: 灰色粘土
  - XI: 灰色粘土. 3cm±までの礫含
  - XII: 灰色粘土. 1cm±までの礫含. 木片・炭化物多めに含
  - XIII: 褐灰色シルト質粘土. シルト~砂の塊を若干含
  - SR4A-1: 砂礫. 下層は砂多し
    - 2: 褐灰色粘土質シルト~褐灰色シルト1cm±大の小礫, 植物遺体含
  - SR5-1: 灰色粘土ややシルト質
    - 2: 褐灰色シルト. 数cm大の小礫含
  - SR6-1: 褐灰色粘土. 炭植物遺体, 木材含
    - 2: 暗灰色シルト. 数cm大の小礫含
    - 3: 灰色粘土
    - 4: 灰色粘土 (上層より明色)
    - 5: 灰色粘土と小礫
  - XIV: 灰色粘土. 植物遺体を僅かに含
  - XV: 暗灰色粘土
  - XVI: 灰色粘土
  - XVII: 灰色粘土 (上下よりやや暗い)
  - XVIII: 灰色粘土
  - XIX: 暗灰色粘土
  - XX: 灰色粘土
  - XXI: 灰色粘土
  - XXII: 砂礫



A3区 東南壁

- A3区南東壁層序
- SR3-1か: 灰褐色シルト
  - SR3-2か: 砂礫
  - I: 灰褐色砂質シルト
  - II: 褐灰色シルト
  - SR4A-1: 褐灰色シルト. 木片多含
    - 2: 褐灰色シルト. 木片・砂礫含
    - 3: 褐灰色粘土質シルト
    - 4: 暗灰色粘土. 植物・炭粒・小礫含
  - SR4B-1: 褐灰色シルト. 木片を僅かに含
    - 2: 褐灰色シルト. 砂多含
    - 3: 褐灰色シルト. 木片多含
    - 4: 褐灰色シルト. 木片・砂礫含
    - 5: 砂礫
  - SR7-1: 砂礫. 褐灰色シルト多含. (木片多)
    - 2: 褐灰色砂質シルト. 砂礫・炭含
    - 3: 褐灰色シルト. 木片・炭化物多含
    - 4: 砂礫
    - 5: 褐灰色シルト. 木片を非常に多含
    - 6: 褐灰色シルトに粘土質シルト混. 木片多含
    - 7: 砂礫
    - 8: 砂礫. 北部で木片・炭を含むシルトと砂礫が互層をなす
    - 9: 荒い砂礫
    - 10: 灰色粘土. 炭化物含

付図3 A区 土層図 (S: 1/40)



付図4 出土遺物39 (S : 1 / 4)

(財)高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第94集

## 桜木遺跡

見谷川河川災害関連工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2005年3月31日

発行 (財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県南国市篠原1437-1

Tel. 088-864-0671

印刷 共和印刷株式会社